私の騎士（かれ）は女の子！？

猿道　忠之進

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の騎士（かれ）は女の子！？

【Ｎコード】
Ｎ８５７３Ｚ

【作者名】
猿道　忠之進

【あらすじ】
戦乱の大陸ハームレイ、その中で最も大きく安定しているのが、騎士の国ベルムンティア王国である。
そのベルムンティア王国の近衛騎士、エスティオ・アストールは若手ナンバーワンと呼ばれる実力者だ。
そんな彼が元宮廷魔術師で、指名手配犯の黒魔術師ゴルバルナを追い詰めるのだが……。あと一歩のところで逆に返り討ちにあう。
意識の途切れた彼が目を覚ますと、彼は絶世の美少女になっていた。
彼女（かれ）の体を取り戻す旅が今、始まろうとしていた。

コメディ女体化ファンタジーです。読んでいただけると、とても光栄です。評価や批評を頂けると、なおのこと光栄です。

プロローグ（前書き）

序盤はタグにある男の子、オネショタ要素は一切ありません。

プロローグ

町に一歩出れば、路地には露店が並んで、活気があふれている。

商店の前で値段交渉をする主婦や、その周囲を駆け回る子ども、老若男女すべてがここの客層である。そんな人ごみの中を、一際体格の大きな青年が歩いていた。

背丈は人より頭が一つ分抜きん出て、体格は一言で表せば筋肉質だ。均整のとれた体つきから、その青年が何かしら武道をしているのはすぐわかる。

その彼の顔はとても不機嫌そうなものだった。

「何が、褒美の休暇だ。ただの厄介払いじゃねえか」

などと毒づく青年は、プラチナブロンドの短髪の頭をかきながら毒づいていた。

「アストール。気分転換は必要だよ。最近は休暇もろくになかったし、いいんじゃないの？」

そう言って彼の横を歩く女性が、話しかけていた。別段女性として背が低いわけでもないが、その青年、エスティオ・アストールの横に並ぶとまるで大人と子どものように見える。

「気分転換か……。こんなにスッキリしないのに、気分転換も何もあるかよ」

アストールはそう言うと、王城で起きた事件の事を思い出していた。

「ああ！　ちきしょう！　思い出しただけで、ゴルバの野郎を逃がしたのが腹が立ってくるぜ！」

アストールはそう言うと、むっとした顔で叫んでいた。
だからと言って、彼を見る人はいないに等しい。叫び声も周囲の活気の中に、飲み込まれていた。

「仕方なかろう。アストールよ。奴は宮廷魔術師でありながら、黒魔術にまで手を出していた。そして、何より、奴はこの国で一番の魔術師だ。あんな悪魔どもを召喚されては、我々とてどうしようもない」

そう言ってアストールを諭すのは、ジュナル・レストニアという魔術師である。彼の従者であり、教育係も務めている。
３３歳と歳の割には落ち着き払っていて、どことなく爺くさいおやじである。

「ジュナルの言うとおり。王城が損壊するくらいに暴れられたら、どうしようもないって」

「メアリー。あいつは今でも黒魔術の生贄を探してるんだぞ？　しかも、生きた人間をだ！　そんな奴を放って、こうやって遊んでられるかよ」

そう言って先ほどの女性、ことメアリーに対して言う。だが、彼女の答えは至って冷静なものだった。

「見つけようにも、見つけられない。ましてや、相手は鼻のいい犬と一緒。こっちが近づけば、臭いに気付いて逃げちゃうよ？　だったら、尻尾だすの待つのが、狩りのセオリーでしょ？」

メアリーはそう言って如何にも、元猟師らしいことを言う。

「だがよぉ。ん？」

反論しようとしたアストールは、そこで言葉を止めていた。

何かを見つけ、目を細めて一点を見つめる。

すぐに異変に気付いた二人は、アストールの顔を見ながら問いかける。

「どうしたエスティオよ？」

「いや、さっきゴルバを見たような気がして、あの外套を被った野郎」

そう言ってアストールは、人ごみの中を指さしていた。その先には確かに外套を頭からかぶった怪しい人物が、歩いている。

「まさか。こんな近くにいるわけないじゃん」

メアリーはそう言うなり、アストールの背中に抱きつくように飛び乗っていた。目を細めて彼の言う外套男を見ると、男は一瞬だけちらりと顔をこちらに向ける。

そこで二人は言葉を合わせていた。

「本当にゴルバルナだ」

「ジュナル！　すぐに駐屯騎士隊を呼んで来い！　メアリー！　お前は早馬に乗って王城に知らせるんだ！」

アストールの的確な指示に、二人は顔を合わせていた。

「何やってる！？　奴が逃げるぞ！」

「だが、エスティオよ。一人で行っては危険すぎるのではないか？」

ジュナルの問いに、彼は不敵な笑みを浮かべて答えていた。

「借りはきっちり返す。俺はあいつを追う！」

そういうなり、彼は腰に下げていた剣をぽんぽんと叩いていた。

「やはり、一人で行くのはよさぬか。ここはやはり三人で行った方が」

「近衛騎士のご主人様からの命令だぞ？」

そう言われると、さすがのジュナルも引き下がるしかない。

因縁のある相手ゆえに、アストールが一人で行きたがるのはよくわかる。だが、相手は元宮廷魔術師であり、現在は大魔術師と言っても過言ではない相手だ。

一人で行くには危険が過ぎる。

「な～に、心配すんな。無理はするが、無茶はしない」

アストールのその言葉に、二人は不安を隠せなかった。だが、呼び止めるよりも先に、彼は走り出していた。

大きな背中を見送った二人は、主人の身を按じながら言われたことを実行するのだった。

◆

「この野郎！　待ちやがれ！　腐れど変態魔術師がああ！」

アストールが駆けているのは、町からほどなくしてある森の中だ。

外套男は彼を見るなり、即座に逃げだしていた。それがアストールの足を、余計に速めていた。

けして若くはないゴルバルナが、１８の体躯のいい青年に追いつかれるのは時間の問題だった。暫くして、外套の男、ゴルバルナは走るのをやめて、彼の方へと向き直る。

「く、この筋肉馬鹿のオーガめ！」

ハアハアと息を切らせた初老のゴルバルナは、アストールを前に毒づく。

「へへ！　体力だけは自信があるんでね！　さあ、変態爺！　覚悟しやがれ」

アストールは鼻をすすると、腰の帯剣を抜いて構える。

例え相手が丸腰であっても、容赦をしない覚悟の表れとも取れる。

「く、こんな男に、私の夢が、計画が邪魔されるとは！」

ゴルバルナはそう言うと、殺気を込めてアストールを睨み付ける。そして、腰から杖を取り出して構えていた。

「観念しろ！　どうせすぐに騎士隊が来る。てめえは終わりだ」

「それはどうかのお？　さあ、行くぞ。炎の聖霊よ。我が言葉にしたが」

詠唱を始めたゴルバルナに、アストールは一気に間合いを詰めていく。

ゆうに大きな家一つ分くらいの距離を、あっという間に詰めていた。

「な、なんと！？」

詠唱が終わるよりも先に、アストールの鋭い太刀筋がゴルバルナを襲う。

ゴルバルナはとっさに杖を横に構えて、彼の太刀筋を防ごうとした。だが……。

剣が杖を真っ二つに斬り、ゴルバルナはおじけずいてその場に尻もちをつく。

「へ、魔術師ってのは、杖がねえと何も出来ねえ人間なんだろ？」

杖を折られたゴルバルナは、不敵に笑みを浮かべるアストールを見上げ、悔しそうに睨み付けていた。

「貴様、それを知っていて、わざとあの距離を」

「ああ。あえて、てめえの杖を切らせてもらったんだ。さあ、次はてめえの番だ」

アストールはそう言うと、剣の切っ先をゴルバの首に突きつける。

形勢は完全にアストールのものとなり、ゴルバは一瞬で表情を変えていた。

「ひいい。ま、待ってくれ。助けてくれ」

おびえた表情を見せて、右手をアストールに向けるゴルバルナ。それを見て、アストールは表情をゆがませる。

「ああん？　てめえはそうやって助けを求める人を、黒魔術の実験で殺していったんだろうが？　助けてやるぎりなんてな、ねえんだよ！」

アストールはそう言うと、剣をゴルバルナの喉元に突き立てようとする。その時だった。

突然アストールの胸の前で爆発が起こり、焼けつくような炎が彼を襲っていた。

爆風で吹き飛ばされたアストールは、剣を抜いた位置まで吹き飛ばされる。

「ぐああ！」

地面に叩き付けられたアストールは、薄目を開けてゴルバルナを見る。ゴルバルナは右手をそのままにして、立ち上がり愉悦に浸った笑みを浮かべていた。

「どうじゃ？　儂の一世一代の大演技は？　見事じゃったろう？」

ゴルバルナは煙の上がる右腕を上げたまま、ゆっくりと歩み寄る。アストールが持っていた帯剣はどこかに吹き飛び、魔法をもろに受けた彼は胸を押さえて動けないでいた。

「な、なぜ。杖は破壊したはずだ……」

その言葉を聞いた瞬間に、ゴルバルナはどっと笑いだしていた。

「ははは。忘れたか、儂は黒魔術師よ。禁断魔法でこのくらいのことなど、容易いことよ！」

一気に形成の逆転した立場に、ゴルバルナはどっと笑いだす。

「ああ、愉快愉快。儂の計画を邪魔し、頓挫させてくれた貴様には最高のプレゼントじゃ」

魔法をもろに食らったアストールは意識を失いかけ、朦朧とする意識の中呟いていた。

「ああ、ちきしょう。最後に最高の女が抱きたかったぜ……」

そういうなり、彼の意識はぷっつりと途切れていた。

本当ならば、ここで彼の命などなくなっていたに等しい。だが、ゴルバルナは右手を下げ、気を失っている彼の前まで歩み寄る。

「ふむ。ただ、殺すだけではつまらんな。どうせなら、もっと精神的に苦痛を与えてやってもいいだろう。わしが味わった以上の苦しみを味わうがいい」

ゴルバルナはそう言うと、またしても歪にゆがんだ笑みを浮かべていた。

◆

ハームレイ大陸、かつては魔法を主流とした大帝国が栄えていた。だが、そんな帝国も皇帝の家柄の断絶によって、バラバラとなってしまう。

今やそのハームレイ大陸はいくつもの国々が乱立する戦乱の世を迎えていた。

そんな中、一際大きく安定した国がある。それがベルムンティア王国。

かの国ではかつて帝国が行っていた非人道的な魔術を禁止し、その魔術を研究する者に罰則を与えていた。

そして、その非人道的な魔術を研究する者を黒魔術師と呼んで、

蔑視することに成功する。世界においてもこの流れが確立し、早、
７００年。ベルムンティア王国は領土が最大となり、最盛期を迎え
ていた、

俺が女の子！？　1

「こっちにはいたか！？」

「いや、いない！」

耳に入ってくる男たちの声を聴き、アストールは目を覚ます。
いまだに魔法を受けた胸が痛み、体も自由に動かない。

「どうするんだ？」

「どうもこうもあるか！　あの黒魔術師を追い詰めたというのに」

男たちの会話を聞く限り、ゴルバルナはそう遠くには逃げていない。
何より、自分はなぜか助かっている。
そのことに安堵しながら、アストールは目を開けていた。

「大丈夫？」

目を開けるとそこにはメアリーがいる。心なしか彼女がいつもより大きく見える。

「気が付いたわ！」

ぼやける視界にアストールは、周囲を見回していた。
森の道を巡回する銀色の甲冑に身を包んだ騎士とその従者たち。
騎士は馬に跨って指示をだし、従者は森の中を捜索する。

メアリーの声に即座に現れたのは、ジュナルだった。彼もまた心配そうに、アストールを見ていた。

「大丈夫かね？」

ジュナルがそう他人行儀に聞いてくる。

心なしか、ジュナルも自分よりも背丈が大きく感じられた。

（これが敗北するってことか……）

アストールはそう思うと、なぜか涙が零れ落ちてくる。

あそこまで追い詰めておきながら、自分の油断でまたしてもゴルバルナを逃がしてしまった。そう思うと、情けなくて仕方がなく、また、胸の奥に詰まっていた思いが吹き上がってきたのだ。

「だ、大丈夫？」

慌てたようにメアリーがアストールの目頭からこぼれた涙をふき取る。

「何か怖いことでもあったのであろう。もしかするとゴルバに乱暴されていのかもしれん」

（そう、乱暴されていた。ん？　待て、確かに乱暴されたが、なんか言い方が違うよな）

「ジュナル！　そう言うことを本人の前で言わないの！」

メアリーがそう言うと、ジュナルは目を背けていた。

「お、おう。すまん。拙僧としたことが、気も使えずにすまぬ」

「でも、もしそうだったら、私、絶対許せない！」

メアリーが珍しく自分のために怒っていることに気付いて、アストールは妙にうれしくなる。ここはもう少し、彼女の膝の上で頭を寝かしておこう。

「にしても、あの筋肉馬鹿。どこ行ったのかしら？」

（ん？　筋肉馬鹿？）

寝つこうとしたアストールは、すぐに目を覚ます。

「全くもって。あのお調子者が。いくら、綺麗な裸の女性を助けたからとて、自分の着ていたすべての衣類までも被せることもなかろうに」

ジュナルの言葉を聞いて、アストールは完全に目を覚ましていた。

（お、おれが裸？　ん？　女性が裸？　じゃなくて、なんだ？　何を言ってるんだ？）

「でも、裸でゴルバを追い回してるとなると、ちょっと笑えるかも」

メアリーがそう言うと、ぷっと吹き出す。

「全くもってその通りだ。まあ、それだけ余裕があるとみていい。安心してあのバカを待とうではないか」

ジュナルも自然と笑みを浮かべて、森の方へと顔を向ける。
明らかに二人は勘違いしていた。なんせ、メアリーとジュナルの目の前に横たわっているのは……。

「な、何言ってるんだ？　俺はちゃんとここにいるじゃねえか？」

瞬時にしてアストールは絶句する。そして、その言葉を聞いたメアリーとジュナルが、怪訝な表情を浮かべていた。

自分の出した声は明らかに女性の声、それもかなりの美声だ。

数瞬動きを止めたアストールは、その場で立ち上がっていた。
立ち上がった瞬間に全ての服が、スルリと抜けおちる。自分の体を見た瞬間に、アストールは言葉を失っていた。アストールだけではない。

周囲の者が一斉に動きを止め、アストールを凝視する。
もちろん、ジュナルもメアリーもである。

手を見れば細く、明らかに女性の綺麗な指が並び、その手を痛む胸に持っていくと、豊満な乳房がついている。

「あ。ある」

そして、そのままぎこちない手つきで、股間まで手を回してがっくしと肩を落としていた。

「な、ない……！」

その奇行に暫し全員が動きを止めていたが、メアリーが慌てて下

に落ちていた服を拾ってアストールの体にかけていた。
「ちょ、ちょっと。み、みないの！　殿方は全員作業に戻りなさい！　さっさと戻れ！」
メアリーの怒るように言うと、全員がすぐに作業に戻っていた。
立ち上がったメアリーと一緒の視点に、アストールは再び絶句する。
「ちょ、ちょっと、これはどういうことだ！？　なんで俺は女に！？」
「なに言ってるの！？　そんなことより、アストールはどこなの？」
奇行に気分を害したらしく、メアリーの口調はきつい。
「え？　目の前にいるじゃねえか」
「はあ？　なになめたこと言ってんの？　あんたがアストールなわけないでしょ！」
混乱するアストールにメアリーが怒声を浴びせた。奇行に加えて見ず知らずの裸の女性がアストールと言い張るのだ。メアリーも気分が悪くなるのも無理はない。
「いやいや、メアリー聞いてくれ。俺はアストールだ。本当に俺なんだ」
「んなわけないでしょ！　あんたみたいな美女が、アストールなわけない！　第一にあいつは男よ！」

「落ち着いて聞いてくれ。メアリー！　何がなんだか俺にもわからないんだ。どうして自分が女になってるかなんて、俺が知りたいくらいなんだ！」

メアリーに対してアストールは至って真剣に話す。

最初は悪ふざけをしていると思ったのだが、とても彼女（アストール）が嘘を言っているとは思えなかった。

メアリーはそれに気付いて、怪訝な表情を見せながらも聞いていた。

「じゃあ、あんたがアストールだって言うなら、証拠をだしなさいよ」

そういわれて、アストールはしばし考えた後彼女に言っていた。

「エスティオ・アストール。王族付近衛騎士隊。第一軍団の軍団員。好んで使用する武器は大剣だ。レマニアル領の領主で、大抵、領内の奉公は爺さんにまかせきりだな。それによく口を酸っぱくして、将来のレマニアルの未来はどうなろうか心配だって言われてるぜ」

自信ありげにアストールは腰に手をやっていう。けして威張れるようなことでもないのだが、なぜか彼は自慢げにしていた。

どれもこれも知ろうと思えば、知れる範囲の答えである。それに対して、メアリーは訝しげに目を向けていた。

「信じられないわ。第一に男が女になれるわけないもの」

「じゃあ、あれはどうだ？　俺がゴルバの秘密研究所を王城地下室で見つけたこと」

アストールの口から出た言葉に、メアリーは押し黙る。

王城の地下にゴルバの研究所があったことは、一部の関係者以外には口外されていない。ましてや、誰かが喋っていれば、それこそ処刑に値する。

だが、それでもメアリーは納得しかねていた。

目の前にいる金髪美女が、アストールの名を語ること自体怪しい出来事だ。もしかすると、魔術にかけられたゴルバの手先ではないかという懸念さえある。

「それに男が女になれるわけない！」

「……じゃあ、どうすれば信じてくれる？」

アストールがそう言うと、メアリーは暫し考え込む。そして、時間をあけて答えていた。

「私との出会いを話して」

それを聞いたアストールは、すぐにしゃべりだす。

「日が昇りきらない朝だったか。お前が狩りをしてて、妖魔８体に襲われてる所を、俺が助けた。確かその時、お前は弓の矢が切れていて、無謀にも素手で戦かおうとしてたな」

そう言われた時、メアリーはにわかに信じがたいが、彼女がアストールであることを確信した。

なぜならば、その運命的な出会いは、誰にも口外していない。また、アストールにもこのことは言わないように口止めしていたのだ。

なおかつ、　初めて会ったのは森の中で、けして街中で見られるようなことはない。

要は二人だけしか知りえない情報である。

「う、うそよ。うそ」

メアリーは半分確信していただけに、余計に目の前の現実を否定したくなる。

「こんなこと、こんなことあり得るわけないじゃない！　絶対にあいつがほかの女に喋ったんだ！　女癖悪いしさ！」

「その言いようはヒドイな！　確かに女癖悪いのは認めるが、俺は秘密は守る男だ。お前との秘密は何一つ他の奴にしゃべってねえ！」

女性の声だが、いつも聞いている口調で言われて、余計にメアリーは胸が張り裂けそうになる。

「う、うそよ。こんな、こんなの」

完全に否定しようがない事実に、メアリーは涙を流していた。

「ちょっと、待てよ。泣きたいのは俺の方なんだぜ？　なんで、お

前が泣くんだよ！」

「だ、だって、だって」

すぐにでも抱きしめてやりたい所だが、生憎、ほぼ全裸の状態だ。幸いメアリーが差し出した服で、体は隠れているが、禁欲主義の宗教騎士隊には生足に生腕はいささか攻撃的すぎる。ジュナルも目のやり場に困っている様子で、泣き出したメアリーに声をかけることができないでいる。

「だあ。もう！　くそお！　あのゴルバめ！　とりあえずあいつのせいだ！」

そうやけくそ気味に言うアストールは、泣き出したメアリーを宥めつつジュナルに目を向ける。

「ジュナル！　すぐに俺の着替えと馬を用意してくれ」

一連のやり取りを見ていたジュナルは、彼女がアストールであることに気付いていた。

「はは。とはいえ、まさかアストール殿が女になるとは……」

そう言ってジュナルはその場を立ち去っていた。

アストールの身がようやく落ち着いたのは、その日の夜の事だった。

俺が女の子！？　2

宿の一室には灯りがともり、温かい光を放っている。だが、その火を囲む三人の表情は暗い。
丸テーブルを囲む三人は、茶色い髪の毛に白髪交じりのジュナルに、茶髪のショートヘアーのメアリー、そして、背中まで伸びた美しい金髪の“女性”アストールの三人である。
酒はなく、あるのは質素なコップに入った水だけだ。

「にわかには信じがたいが、これまでの話を聞く限り、この方がアストール殿であるのは間違いない」

ジュナルは渋い顔をして、アストールを見つめていた。
この宿に戻ってから、メアリーとジュナルは女体化したアストールを、改めて尋問していた。
事細かに最近あったことから、本人しか知りえないことを次々質問する。
当然、アストールは全て答えていた。

「……やっぱりあんたは本当にアストールなのね」

メアリーはとても残念そうにうつむく。

「ああ。そうだ」

アストールは少し服がきついのか、胸元ばかりを気にかける。

「にしても、少し胸のあたりがきついな」

その空気の読まない発言に、メアリーはぎっとりとした視線でアストールを見る。

「なによ。それは私の胸が小さいって、遠まわしに言いたいの？」

「い、いや、そうじゃなくて、純粋にきついんだってば」

そう言ってアストールは、自分のはち切れそうな服の胸元を指さしていた。

女性ものの服がなく、急遽メアリーの服の着替えをきているのだ。もちろん、アストール本人の服など、とてもではないがぶかぶかで着れたものではない。

「なによ！　やっぱり、冷やかしじゃない！」

「う、うるせえな！　俺だって望んでこんな体になったんじゃねえよ！」

「その言葉、余計に腹立つわ！」

メアリーがそう怒声を浴びせるが、ジュナルはため息をついてなにもしない。というよりは、アストールの胸元が気になっているせいか、どうにも目のやり場に困っていた。

「二人とも喧嘩はよせ。それよりもこの状況をどうカルマン殿に説明すればいいのか。それを考えようではないか」

休暇で訪れたこの町は、レマニアル領に帰郷する途中で寄った町だ。

まさかこの様な事になるなど、誰が想像していようか。

「……爺さんには本当のことを話すしかないだろう。それよりも俺が気になってるのは、騎士としての仕事の方だ」

アストールはそういうと、窮屈そうに胸の前で腕を組む。

ジュナルもメアリーも名案が思い浮かばないのか。全く言葉がでてこない。

「この状況だもの。急にいろいろ考えろっていわれても無茶よ」

メアリーはそう言うと大きく溜息を吐いていた。

「ふむ。まあ、そうであろうが、一応の指針はあったほうがよかろう」

ジュナルはそういうと腕を組んで考え込む。

「とりあえず、王族付近衛騎士団の騎士に女は禁制。というか、騎士そのものが女性は禁制だったわよねー」

メアリーはそういうと、アストールを見つめた。

騎士団の従者くらいならば、女性がいてもおかしくはない。だが、当の騎士の身分となると、話は違ってくる。

基本的に騎士の位に付けるのは男のみであり、女性が爵位を貰うことはない。

もしも、女性であることを公表して、形式的に騎士として居続けたとしても、いずれは爵位剥奪と言う危険さえある。

「何かいい方法はないかな……」

メアリーはそう言うと、考え込んでいた。

「いっそのこと、自分を偽ってみてはどうか？」

ジュナルがそう提言すると、アストールは苦い顔をする。どうせろくでもない提案であることに違いない事を確信しつつ、アストールは聞いていた。

「どういうことだ？」

「そうだな……。お前は実は生き別れた実の妹であり、自分の体を取り戻すまでは、兄、すなわちお前自身の騎士代行を務めるということにしておけばいいのではないか」

ジュナルの提案はある程度、説得力のあるものだった。

彼ら騎士の世界において、主人が行方不明になったり、長期で国外に出張した際は、誰かしら従者が騎士代行を務めて業務を行うことがある。

その任命権はもちろん、その主人たる騎士にある。

これは別段珍しいことではなく、従者に女性がいれば、代行を女性に頼むことさえあった。とはいえ、それでも女性の騎士代行は、異例には違いなかった。

「かなり目立つんじゃない？　それ」

メアリーはそう言ってジュナルに疑問を問いかける。

「確かに目立つであろうな。しかし、拙僧やそなたが騎士代行になって、アストール殿に指図することなど、できようかな？」

ジュナルは腕を組んで細目で、メアリーを見ていた。
「うぅ。確かにちょっと抵抗がある」
「ちょっとってなんだよ。主人だぞ？」
「なによ。別に全く忠誠心がないわけじゃないもん！」
メアリーが子どもっぽく言い返すと、ジュナルは苦笑していた、
「二人とも落ちつきなさい。エスティオよ。今日から女を演じるのも、悪くない提案であると思うが、どうであろうか？」
ジュナルが微笑を浮かべて、アストールを見つめる。
アストールは頬をピクつかせ引きつった笑みで、ジュナルと目を合わせていた。
「じょ、冗談じゃねえええ！　俺は男だぞ！？　急に女になれなんて、無茶があるだろうが！」
そう言ってアストールは椅子から立ち上がり、自分の胸を押さえていた。
彼の手に伝わる柔らかな乳房の感触、それが自分が女であるという現実を突きつける。
アストールは勢いよく叫んだことを後悔していた。
表情は暗いものとなり、ゆっくりと椅子に座る。
「す、すまねえ。確かに今は女だ……」

アストールは心底落ち込み、ため息をついていた。

「わかればよい。とはいえ、いきなり女を演じよと言っても無理であろう」

ジュナルは自分で提案したことを、いきなり否定しだした。

「というわけで、一か月ほど修道会に行ってきてはどうか？」

アストールは再び顔色を変えて、ジュナルに叫んでいた。

「ば、馬鹿言え！　なんでそんなとこに行かなくちゃなんねえんだ！　女しかいない上に陰湿だし、飯はまずいし、生活は真面目くさって規制されまくってるような場所、絶対に行かねえぞ！」

貴族の女性はある一定の年齢になると、貴族専用の修道会に入れられて、改めて貴族の嗜みというのを再教育される。

一夜を共にした女性から話を聞いていたアストールは、その厳しさと女の世界の怖さというのをある程度は知っていた。

「なんで、あんたがそんなこと知ってるの？」

メアリーが鋭い突っ込みを入れて、アストールは言葉を詰まらせる。

「あ、そ、それはだな。えーとだな。まあ、みんな知ってることじゃないか？」

「そうかな？　普通の殿方は修道会ってきいても、そこまで知らないんじゃない？」

「……ど、どうだっていいだろうが！　そんなことより、俺は絶対に行かないからな！」

焦って話をはぐらかすアストールは、ジュナルを睨み付けていた。このような提案をされるとは、思っても見なかったのだ。

「では、どうするか？　エスティオ。お前はいきなり女を演じることができるのか？」

アストールはそう言われて、言葉を詰まらせていた。だが、すぐに言い返していた。

「お、女とたくさん寝てきたし、他の騎士と違って、普段から女と付き合いがあるんだ！　そのくらい楽勝に決まってんだろ！」

彼の発言を聞いたジュナルは苦笑して、彼に言っていた。

「では、まずその喋り方から変えねばなるまい」

「うぅ。こ、これはどうにもなんねえよ」

「それに歩き方だ。傍から見ても男と分かってしまうような歩き方」

そう指摘されたアストールは押し黙るしかなかった。

いきなり女性を演じろと言われても、そうそうできるものではない。それは彼自身がよくわかっていた。

「……。だからって、そんなとこに俺を入れて、しかも、女そのものになれってのは、酷すぎるぜ」

今にも泣きだしそうな顔で、アストールはうつむいていた。

「じゃあ、女になりきれるっていうの？」

メアリーの言葉に対して、アストールは暫し黙っていた。だが、すぐに顔を上げて、答えていた。

「やるしか、ねえだろ。一か月も修道会で遊んでたんじゃ、ゴルバルナの野郎に逃げられちまう。それにあいつにこんな体にされたんだ！　戻るためにも早急に奴を見つける方が先だ！」

最もらしいこと、否、最もな意見を盾に、アストールは修道会入りを拒否する。

ジュナルもそれには納得したらしく、大きく頷いて見せていた。

「そうであったな。確かに優先すべき事を間違っておった」

「そうよね。こんな女のアストールなんて、何か馴染めないしね」

「だったら、決まりだろ！　俺も努力して極力女を演じる。だから、協力してくれ！」

アストールの真剣な表情に、メアリーは優しい笑みを浮かべる。

「当たり前でしょ！　あんたにはさっさと男に戻って、じゃんじゃん騎士として仕事してもらわないといけないし！」

ジュナルは腕を組んだまま、アストールを見つめていう。

「レマニアル領をいずれは治める身、それが女性であっては他の諸侯にも示しがつきませぬからな」

そう言われてアストールは苦笑していた。いずれは自分も祖父、父と代々アストール家で守っていた領地を引き継ぐのだ。

そうなれば、今の体のままではどうすることもできない。

結婚して養子婿をとるという選択肢もあるが、生憎、アストールは女として生きていくつもりはない。

「よし、じゃあ、さっさと爺さんに話を付けに行こう！」

「そうであるな。さて、その前にエスティオ。そなたの名前も女として改名しておかなければなるまい」

ジュナルはそう言って腕を組んだまま、アストールを見つめる。どうしても自分を女に仕立て上げたいらしく、アストールは心底機嫌を損ねていた。

「おいおい。勘弁してくれ」

「仕方あるまい。まあ、容姿からして17くらいで通じる。一つ下の妹ということで、そうであるな……。エスティオ、エスティオ……。ああ。エスティナはどうか？」

一人で勝手に話を進めていくジュナルに、アストールは諦めていた。

この後、ジュナルとメアリーによって、アストールの妹設定は次々と決められていくのであった。

苦痛の真剣試合　1

レマニアル領についたアストールたちは、早速事情を祖父のカルマン・アストールに話していた。

領内の中心にあるアストール家の館。その一室でアストールの姿を見たカルマンは、その場で泣き崩れて嘆いていた。だが、暫くしてから、アストールら三人の提案を受け入れていた。と言うよりは、受け入れざるをえなかった。

「俺が俺の妹を演じるから、爺さん。手続きとか色々頼む。この通りだ」

変わり果てた自分の孫の姿とはいえ、その動作からは確かに元の孫の面影が見える。白髪の祖父カルマンは、大きくため息をついて答えていた。

「仕方なかろうに。そのかわり誓え。絶対にゴルバルナを捕まえ、元の体に戻ると」

「神に懸けて誓う。爺さんにまた、元の元気な俺を見せてやる」

「うむ。それでは、書面の作成をしろ。王族付騎士団には私から話を付けておく」

カルマンはそういうなり、部屋から出て行こうとする。だが、入り口の前で立ち止まり、アストールの方へと振り向く。

「お前は元の体に戻るまで、今日よりエスティオの妹、エスティナだ。それは肝に銘じておくのだ。わかったな」

「わかってるって、爺さん」

その軽い口調に、カルマンはアストールを睨み付ける。

「わかっておらぬ。それではまるで男ではないか！」

そう言われて、アストールは渋々口調を改めていた。

「わかりました。おじい様。これでいいか？」

何かを言おうとしたがカルマンは、喉まで出かかっていた言葉を飲み込んで、溜息をついて答えていた。

「まあ、いいとしよう」

そう言ってアストールの祖父、カルマンは足取り確かに部屋から出ていくのであった。

それと入れ替わるように、ジュナルとメアリーが部屋に入ってくる。

「どうであったか？」

ジュナルが心配そうに聞くと、アストールは得意げに胸を張って答える。

「ああ。爺様は俺が騎士代行を務めることを、騎士団に話しつけてくれるとさ」

「そうであったか。それはよかった」

ジュナルは胸をなでおろして、一時的に状況が安定したことに安堵していた。

「まさか、アストールが女だなんて、誰も思いもしないだろうし、騎士団に行っても大丈夫かもね」

メアリーはからかうようにアストールに言う。

「まあ、美貌を持った女であるし、強さも変わってないはずだ。そこは心配ないだろう」

アストールはそう言うが、ジュナルは何か不安そうな表情をしていた。

「その事で話がある」

深刻そうな表情を浮かべたジュナルに、アストールは怪訝な顔をして彼を見る。

「何だ？　話ってのは？」

「それなのだがな。ここに来てから書斎で黒魔術関係の書物を調べていたのだが、ある程度のことが分った」

相も変わらず深刻そうな表情のまま、ジュナルはアストールに続ける。

「なんだ？」

「力は男のときより大分落ちている。その体はあくまで女なのだ」
「え？」
ショッキングな事実に、アストールは言葉を失う。
「うそだろ？」
「本当だ。その証拠にそなたの部屋にある大剣を持ってきてやった」
ジュナルはそう言って肉厚な両手剣を、アストールの前に差し出していた。
「いやいや。冗談はよしてくれよ。これで毎日練習してきたのによ」
そう言いながらアストールは、大剣を受け取る。
いつもよりもずっしりとした感覚が手に伝わり、アストールは心の中で焦燥していた。
明らかに手に持った感覚だと、いつもの数倍は重く感じられる。
いつもならば軽々と持ち上げて、この剣を両手で構えて甲冑ごと相手を叩き割れるのだが……。
今はどうだろうか。
柄を持って構えようとしても、まず持ち上げるのがやっとの状態だ。
「う、うそだろ……」
どうにか剣を両手に構えるが、今のアストールにはそれが限界だった。
大きな床を割るような音と共に、アストールは大剣を落としてい

た。
それと同時に床に腕と膝を着いて、じっとして動かなくなる。
「む、無理だ。こんなに力が落ちてるなんて、想像もしてなかった」
絶望するアストールに、ジュナルは困ったように彼女を見る。
「当然の結果と言うことか……」
「クソ……。これじゃあ、どうやって戦うって言うんだ」
アストールはそう言うと、拳を握り締めていた。今の今まで騎士になるよりずっと以前から、大剣を扱うために並大抵以上の努力をしてきた。
毎朝、貴族としての勉強の合間には筋肉を付けるために日々トレーニングし、常に自分より大きな真剣で素振りをしてきた。
体が大きくなれば、自分よりも一回り大きな剣を用意し、毎日それで素振りをする。
そうして幼い時から剣を変えては、自分で訓練していた。それから、騎士の従者となってから、最高の訓練を受けて、今の大剣を使えるようになったのが丁度二年前だ。
物心ついた時から怠ったことのなかった努力が、今、水泡とかしていた。
自分の力のなさに、アストールは絶望し、努力の儚さを憂い悲しむ。
その落ち込みようを見たメアリーは声をかけ様がなく、ただ、目をそむけるだけだった。
「だが、その剣術が全く使えなくなったと言うわけではあるまい」

そう言ってジュナルが、剣を差し出してくる。
剣の柄には蔓と柏の装飾が施され、どことなく高貴さを感じさせる。刃そのものも細身であり、男であったころに持てば、棒の枝切れと同じ感覚で振ることもできただろう。

「俺の趣味じゃあねえな……」

「文句を言うでない」

アストールはそう言いつつも、ジュナルから細剣を受け取っていた。予想外に手にしっくり来る上に、重さも軽すぎず、だからといって重過ぎない。
今の体には最もフィットする剣であることは間違いなかった。

「悔しいけど、この剣が一番いいかもしれねえ」

細剣を鞘から抜くと、銀色の刀身を見る。そして、構えてからニ、三度素振りすると、そのまま鞘に閉まっていた。

「扱いやすい……。くそ……。こんな細身の剣なのに」

今の動作を見れば、剣舞を舞っているかのごとく鮮やかであった。本人がそれを一番分っている分、余計に悔しさがにじみ出る。

「っまあ、そういうわけだ。これからはその細剣に暫く厄介になるだろう」

何も言い返せずに、アストールはその場で肩を落とすのだった。

◆

アストール達は領内で数日間の休暇を取ったあと、すぐに王都ヴァイレルに戻っていた。
休暇の間も書類の用意に加え、女性モノのレギンスにブーツを購入し、オーダーメイドのプレートアーマーにヘルメットを用意せねばならず、ろくに休めもしなかった。
とりあえずは領内一の鍛冶屋にプレートアーマーなどの甲冑類防具一式の製作を依頼し、そのまま王都に向かっていた。
出来上がればすぐにでも王都に届ける手はずは整えている。
そして、王都についたアストール達は、早速第一近衛騎士軍団の軍団長、エストル・キャビオーネの元へと向かっていた。
エストルはブロンドの髪の毛であるが、アストールとは対照的に長く髪の毛を伸ばし、その美形の顔は美青年と呼ぶに相応しい。典型的な騎士像というに足りる外見である。
だが、内面はアストールと同等か、それ以上の遊び人である。
体の線が細いエストルは、騎士団長の席に座ったままアストールを見つめる。

「で、君があのエスティオの妹君の」

「エスティナ・アストールです」

アストールはそう言って、以前から知っている知人に自己紹介していた。
先輩であり、上司であり、そして、何より、女遊びでアストールに新たな境地を与えたのが他ならぬエストルだ。それだけに、アストールは警戒しなければならなかった。

「それにしても、お美しい……」

早速のお世辞攻撃に、アストールは内心気分を害していた。
顔はかなりの美形、そして、何より脱げば引き締まったスタイルのいい適度な体、そのラインを強調するかのような服の着こなしは、普段から女性を意識しているからだろう。

「お褒めにつかって、感謝します。それよりも、私の騎士代行の件につきまして、お話が」

軽く流してエストルに言うと、彼は少しだけ表情を歪めて答えていた。

「ああ、その件であったな。貴公も生き別れて生活していたとはいえ、貴族の血を引くもの。その資格は十分にある」

アストールはエストルを見据えて、少しだけ表情を柔らかくして言う。

「ありがとうございます。では、今日からでも騎士代行の務めを」

「ならんな。まだ話は途中だ」

エストルは椅子に肘をついて、足を組んでみせる。その大きな態度に、アストールは内心憤慨していた。

「せっかちなところは兄上によく似ている。貴公に騎士になる資格はある。だが、例え騎士となっても、頭だけではなく武術に関しても、確かなものがなければならない」

女性であるがゆえに、余計にその辺りを気にするのだろう。
エストルは真顔のままアストールに言っていた。

「貴公は確かに貴族の人間。しかし、女性である上に、今の今までは街で暮らしていたと聞く。そんな貴公に武術ができるのか？」

疑わしい視線を向けられ、アストールは思わずムッとなる。

いつもの口調で叫びそうになるのを我慢しつつ、アストールは言い返していた。

「もちろん、できますとも。こう見えて、兄上とあった時は稽古を付けてもらってましたから。少なくとも、そこらの男よりは強いはずです」

アストールはそう言うと腰の細剣に手を置いていた。エストルはそれを聞いて、しかりと笑顔を浮かべていた。

「ほほう。そうか。だが、その実力は未知数だ。どうだ？　私と勝負して勝てば、騎士代行を務めさせるのは？」

「え？」

そう言われて、思わずアストールはその甘い言葉に乗りそうになる。

今の今まで、一対一の戦いでは、どの騎士にも負けた事はない。それゆえにその言葉はとても甘い蜜のように感じられた。

だが、アストールは自分が女の体である事を思い出し、すぐにその提案にのるのをやめるか迷いだす。

「そ、その、それは少し、酷なものがあるんではありませんか？」

そう言って助け舟を出したのは、メアリーだった。彼女の言葉に

エストルはムッと眉を吊り上げて、メアリーを見つめる。

「酷なことなどあるものか。どのような敵に対しても、対応せねばならない。それが騎士の務めであろう。ましてや、ここの騎士に勝てないようでは、騎士代行など務まるものか」

などともっともらしい事を言うエストルだが、本当のところは得体の知れない女に騎士代行を務めさせたくないのが本音だ。

無理難題をふっかけて、早々に退場してもらいたいと言うのだろう。だが、ここでアストールも引き下がるわけにも行かない。

自分の体を取り戻すために、絶対に騎士代行となり、ゴルバの行方を追わなければならないのだ。

「確かに、エストル卿の言う通りでございます」

そう言ったのは意外にも、アストールの信頼する従者、ジュナルだった。

「流石は聡明な魔術師殿、分っておられる」

エストルは笑みを浮かべて、ジュナルを見つめる。それにジュナルも柔和な笑みで返していた。

「とはいえ、軍団長自らがお相手することもないと思うのですがな」

「何？」

瞬時にしてエストルの表情が険しいものとなり、周囲に険悪な空気が流れる。

「この様な小娘相手に、態々軍団長が手を煩わすこともありますまい。それにいくら本場の騎士に稽古を付けてもらっていたとはいえ、女性であります。ここは騎士見習いか、新人騎士程度に勝てるほどの実力があれば、十分に武の才能があると証明もできると拙僧は考えます。どうでしょうかな？」

ジュナルの提案は話のはぐらかし様がないほどに、的を射ていた。騎士代行の実力を推し量るだけに、軍団長自らがでしゃばるのは、いささか大げさが過ぎるのだ。もし、出たとしても、それこそ軍団長として恥というものである。

それが分らないエストルではない。

ジュナルの言葉を聞いたエストルは、渋々にこういっていた。

「それもそうであるな。ジュナル殿の言うとおり、私が行くのもでしゃばり過ぎというものだ」

アストールはエストルが自分の相手をしない事を、心から安堵していた。

武術に自信があるとはいえ、それは男の体であった時の話だ。今はまだ自分の実力さえわからないのである。

「では、その方向でよろしいですかな？」

ジュナルの問いかけに対して、エストルは大きく頷いて見せていた。

「そうだな。こちらで相手は手配しておく。準備ができ次第、また追って連絡しよう」

エストルの納得いかない表情を見て、アストールは内心思う。

（ざまあ、見やがれ、優男め！）

この後待ち受ける試練のことなど、今のアストールには知るよしもなかった。

苦痛の真剣試合　2

エストルとの面会から数日が経った。そんなある日、アストールの元に騎士団の使いがやってきていた。
王城の一室をあてがわれていたアストールに、敬意を払いつつエストルの従者は慇懃に礼をして見せていた。

「それで、いつ私を試す試合をする？」

アストールは慣れない口調で、従者に聞いていた。

「はは、三日後に新人騎士のウェイン・ハミルトンと真剣試合をしてもらいます」

その言葉を聞いたアストールは、しばし言葉に詰まっていた。
ウェイン・ハミルトン。アストールと同い年の騎士で、質実剛健という言葉がぴったりの騎士である。体格はがっしりとしているが、適度な筋肉量でアストールほどの筋肉はない。それゆえに素早く動き、なおかつ力技の使える手ごわい相手である。

アストールは何度か稽古で手を合わせたが、ちょこまかと動き回られ、苦戦したのを覚えていた。それでも隙が全くないわけではなく、一瞬の隙をついてウェインを打ち負かした。
今のところは負けることはないが、こちらが努力を怠れば、すぐにでも追い越される相手であることに間違いはなかった。
それはあくまで男であった時の話であるため、アストールからすれば勝機のある相手とは思えない。

「ウェインをあてつけるか……。エストルめ」

そう呟いたアストールに、従者は怪訝な表情を浮かべていた。

「ウェイン殿をお知りで？」

問い詰められたアストールは、すぐに笑ってごまかしていた。

「ああ、いや、兄上から聞いたことのある名前で。話には聞いているのです」

自分の言葉使いを気持ち悪いと思いつつ、アストールはすらすらと答えていた。

「そうですか。それでは油断なきよう心して挑んで下さい」

そう言うなり従者は部屋から出ていく。

後ろにいたジュナルは、アストールを見てから苦笑していた。

「どうやら、私の提案は逆にそなたの首を絞めてしまったようだな」

「え？　いや、何にしろ一緒だ。どうせ相手は男、今の俺では結局不利なことに変わりねえ」

アストールはそう言って立ち上がり、部屋にかけてある鏡の前まで行く。

女性物のレギンスにブーツが、その綺麗なヒップラインを強調している。それに加えて上半身の豊満な胸と腰の括れが、憎らしいほどのエロチズムを感じさせる。

それだけではなく、凛々しい目つきにほっそりとした顎のライン、透き通るように綺麗なプラチナブロンドのロングヘアーの美女が、

鏡越しに立っている。

「だあああ！　畜生！　見れば見るほどにいい女じゃねえか！　くそおお！　なんで俺はこんないい女になっちまってるんだあああ！　できるなら、今すぐこの女を抱きたいぜ！」

半分やけくその本音をこぼしながら、アストールは自分の頭を掻き毟る。

メアリーは呆れながら、首を左右に振っていた。

「女遊びを自重しろという神のお告げかもしれぬな」

ジュナルがその様子を苦笑してみると、アストールは表情を歪める。

「そんなお告げなんてクソくらえだ！　畜生、この世で一番いい女と思ったのが、なんで自分なんだよ！」

けしてナルシストな発言ではない。アストール自身が男であれば、こんな女性を目の前に通り過ぎたりはしないだろう。

だからこそ、この発言なのである。

「まったくいい薬よ。せっかくのいい女なんだし、いっそのこと喜んだら？」

皮肉以外の何物でもないメアリーの発言に、アストールは大きくため息をついていた。

「そうかもな。いや、そうじゃない！　全部ゴルバが悪い！」

アストールは一人納得してから、自分の腰にある細剣に手をかけていた。

「絶対にあいつを捕まえて、元の体に戻ってやる！　その後で酒池肉林の宴だ！」

などと不純なことを口に呟く始末、メアリーとジュナルは顔を見合わせて首を振って呆れるしかなかった。

◆

「うーイライラする。なんでこんなにイライラすんだ」

その日のアストールは妙に落ち着きがなく、机の上に肘をついて指をトントンと叩いていた。メアリーは何気なしに、彼に言う。

「やっぱり、急に体変わったからじゃない？」

「そうか？　まあ、それならいいんだが、なんとなく腹が立つというか」

戦いの日が前日にせまっていたその日、アストールは妙に落ち着きをなくしていた。

女性である体に慣れないと、そう言われるとアストールも納得がいく。だが、それでもこのイライラは何かが違う気がするのだ。

アストールは居ても立ってもおられず、椅子から立ち上がっていた。、

「あー畜生！　気が晴れねえ！　明日が試合だってのに！　なんでこんなにイライラすんだ！　ちくしょおお！　メアリーちょっと、肩慣らしでもしてくるわ！」

「なら、私もついていく～」

気軽にそう言うメアリーは、アストールと共に王城の武術場へと向かっていた。

王城にある武術場は、文字通り武術を練習する場所である。近衛騎士以外にも、その従者や貴族といった武人が多く集まる場所である。

武術場につくと、騎士や貴族、そしてその従者と多くの男性が稽古をしていた。

騒がしさこそないものの、その真剣な雰囲気にメアリーは気圧されそうになる。

「さて、やるとするか！」

アストールは細剣を腰から抜く。そして、すぐに素振りを始めていた。

武術場に女性が居るだけでも異質であるのに、それが美人であるとなると目を惹かないわけながない。

素振りをするたびに、揺れるアストールの胸に周囲の男性たちは様々な表情を見せる。

アストールを注視するものや、厭らしい目をする者、また、目のやり場に困るものなど、人それぞれ、個人の性格が如実に表れる。

とはいえ、男ゆえに胸に目が行くのはしかたがない。

それでもアストールは周囲の視線を気にする素振りを見せない。

いくらか素振りをするが、アストールは首をかしげる。

「どうにも型が定まらないな……」

そう言ったアストールは細剣を上段から振るうと、振り下ろした細剣を下ろしきった位置から再び振り上げた。かと思えば、今度は柄を両手に持ち、横に薙いでいた。そして、すぐに反対方向に細剣を薙ぐ。

それはあくまでも、両手剣を扱う時の型が混じった異様な型とでも言うものだろう。

細剣であるならば、片手で剣の切っ先を前に構えて、突くことが基本となるからだ。

周囲の騎士達からすれば、女如きが武術の基礎を知らずに剣を振っていると、噴飯ものであったりするのだが……。

アストールのその動きのキレの良さには目を見張るものがあった。それが余計にアストールに注目を集める。

「う、美しいな」

「ああ、全くもって。剣術こそ半端だが、動きはなぜか素人を感じさせんな」

そう呟いた騎士二人が、アストールの近くで腕を組んで彼女(かれ)の剣術を見ていた。

アストールは当初、それほど気にはせずに練習に集中する。右に左にと剣を振り、そして、相手がいるかのごとく身を動かしていく。

長く伸びた髪が靡き、美しい体と相まって、それはさながら音楽に合わせて綺麗に踊っているようにさえ見える。

周囲の目が集まるのも、時間の問題だった。

気が付けば、周囲には人垣ができていて、アストールはそれに気付いて剣を腰の鞘にしまっていた。

「ちょ、ちょっと、何なんだよ！　あんたたちは？」

気分が乗ってきたところで、急に集まりだした人々。

今までこの武術場で何度となく練習をしてきたが、こんなに人だかりができたのは初めての経験だった。

いつもならば、憎たらしい言わんばかりに年上の騎士が睨み付けてきたり、新人からは嫉みの視線を浴びてと、敵だらけだった。

それがどうだろう。美少女の体になった途端、周囲は騎士やその従者、貴族に取り囲まれていた。

今まで経験したことのない異様な雰囲気と男の猛る性を前に、アストールは後ろに一歩下がる。

そんなアストールにお構いなしに、一人の貴族が彼女（かれ）の前に歩み出ていた。

「私の名前はマルクス・ゲオル公爵。あなたはお美しいうえに、剣術まで心得ている。よければ、私にあなたのお名前をお教えください」

「あ、この野郎！　抜け駆けさせるか！」

ゲオルと名乗った貴族の前に、また違う男がアストールの前に現れる。

だが、彼は名乗ることなく、次の男に殴られて床に突っ伏す。

「脅えてるだろうが！　さあ、お嬢さん。こんな所は危ないですから、私と共にでましょ」

男の言葉は最後まで続かず、また、別の男が殴り倒していた、

「おい！　お前といる方が危ないだろ！」

「どっちが危ないことか！」

「なんだと！」

男たちは勝手に争いごとを始め、武術場は乱闘の場となっていた。

呆れかえるアストールに、メアリーは何故か不服そうな表情を浮かべる。

本来男であったアストールが、女である自分よりも男を引き付けていることに、多少納得がいかないのだ。

アストールは大きく息を吐いた後、メアリーに言う。

「面倒なことになったな……。場所を移そう」

乱闘に加わりたい衝動を抑えたアストールは、メアリーを連れて王城の中庭へと向かっていた。

二人の背中では尚も、乱闘騒ぎが続いていた。

「だあ、ちっくしょう！　全く、男にもてたってうれしくないんだよ！　くそ」

二人して王城の中庭に出て、アストールは細剣を抜いて素振りを始める。いつもよりも荒々しく剣をふるう姿は、正に何かに憑りつかれた様な我武者羅さ。

少し上手くいかないだけで、叫び声を上げる。尋常ではない苛立ちようだ。

先ほど武術場で見せた華麗な剣術も、今は見る影もない。

「だあ！　もう！　ちっとも型が定まらねえ！　やめたやめた！」

そう言うなり細剣を鞘にしまう。

まだ、素振りを初めて数分も経っていないにも関わらず、すぐに剣舞をやめていた。

「このクソ虫！　鬱陶しい！」

アストールは近くを飛ぶ綺麗な蝶を見て、更に苛立っていた。

この異様な苛立ちは、先ほどの剣舞の邪魔から来るものではない。

尋常ではない苛立ち、メアリーはその苛立ちが何から来るのか、心当たりがあった。

「まさか、まさかね……」

そう言いつつも、メアリーは半分確信していた。この苛立ちの原因が、“あの日”の前兆であることを……。

苦痛の真剣試合　3

「それではこれより、騎士代行の試験試合を開始したいと思います。使用する武器は自由、また真剣を使うため、お互いに命を落としても恨みはなし」

立会人が王城の中央中庭で、叫ぶように言っていた。
大勢のギャラリーが集まり、周囲には人垣ができている。

王妃やその娘の王族に加え、彼らを取り巻いている有力貴族の娘たち、それ以外にも暇を持て余した騎士達に、王城の近衛歩兵に給仕、侍女など、上げればきりがない。

それもこれも、今日、異例の女性騎士代行が誕生するかもしれないという、王国始まって以来の一大イベントが開催されているからである。
その人垣の輪の両端に、それぞれの陣営が居座っていた。
一つは第一近衛騎士軍団の軍団員たち。そして、もう一方がアストールとジュナル、メアリーの三人である。

「ふむ。相手側は王族も来ているというからに、かなり緊張しておる。これは十分に勝機があるな」

腕を組んだままジュナルが、冷静に相手陣営を注視する。
アストールの相手であるウェインが、いくら実力者とはいえ、実戦の経験もなければ、王族の前で剣の腕前を披露した経験などあるわけがない。
そのせいかウェインの表情は固いを通り過ぎて、青ざめているように見えた。

「でもさ、こっちもこっちで大問題なんだけど……」

メアリーがそう言って顔色の優れないアストールを見つめる。

その顔は苦痛にゆがみ、額には脂汗をかいていた。

「うう、いてえ。なんだ……この金的受けたような腹痛の持続は……」

腹を押さえて動けないでいるアストールは、息を荒げていた。

「そうよね……。昨日あれだけ苛立ってたし、そうだとは思ってたけど……」

メアリーは半ば諦めた様に、首を左右に振っていた。

「も、もしかして、アストールよ。生理痛か？」

ジュナルのデリカシーのない質問に、アストールは痛みに耐えながら答えていた。

「ああ、そうだよ！　畜生！　やっぱり女なんていやだ……」

小声でそう弱音を吐くアストールは、それでもどうにか痛みをこらえて立ち上がる。

「アストール！　大丈夫なの？」

メアリーの心配をよそに、アストールは苦笑しながら答えていた。

「だ、大丈夫だ。あんな、新人野郎、ちょちょいとやっつけてくる……」

アストールは場馴れしている上に、何度も王族とは顔を合わせている。この状況程度で上がるようなことはない。

とはいえ、初めて味わう女性の苦痛に、アストールが圧倒的に不利なことは間違いなかった。

「これでは、互角か、それ以下の戦いになりかねないな……」

ジュナルは心配そうに言うが、始まってしまったものは仕方がない。

彼が勝つことを祈るしかない。

「それでは両者、前へ！　定位置へつけ！」

立会人を務める男の声で、アストールとウェインは対面した。

皮の胸当てをしたウェインは、アストールを見て少しだけ表情を固める。

同じようにアストールも、皮の胸当てをしているが、動きやすい服装のためか、自然と女性らしい体型を前面に押し出していた。

「ルールは先ほど説明したとおり、どちらかが降参するか、武器を落とすかである」

審判員は最後の確認をするように、両者を見た。そして、二人が剣を抜き、お互いに構えたのを見て叫んでいた。

「始め！」

それと同時に、ウェインは騎士の試合に乗っ取った形で、剣を胸の前に持っていき自己紹介を始めていた。

「我が名はウェイン・ハミルトン！　ベルムンティア王国の由緒ある騎士である！　お手合わせねが……」

両手でも片手でも使える長めの剣を、ウェインは胸の前に構えたまま言葉を続けようとする。だが、アストールは名乗ることなく、彼に一気に詰め寄っていた。

「問答無用！」

その一声を上げ、アストールはウェインに正面から細剣を振り下ろす。

思わずウェインは後ろに下がって、即座に剣を構えなおしていた。

繰り出される次の一撃を、ウェインは長剣で受け流す。

大きな金属音が中庭に響き渡る。

「な、名を名乗らないのか！？」

「そんなの実戦じゃ、通用しねええ！！」

機敏に動くアストールは次にまた、即座に細剣を振り下ろす。

その動きは傍から見れば、まるで踊り子が華麗に舞っているように見える。

「こ、これは試合だ！　形式上名を名乗るのは普通だろお！」

そう言って一瞬の隙をついて、ウェインは剣を振り下ろしてくる。

彼の一撃を受けきれないと判断したアストールは、即座にステップ

で後退していた。
空を振るウェインの剣が、周囲の観客をどっとにぎわせる。
「ちょこまかと！」
ウェインは睨み付けるように、アストールを見つめる。だが、すぐに彼女の異変に気付いた。それほど動いていないにも関わらず、額には汗をかいている。
それ以外にも腰を少しだけ引き、剣を持たない手で腹を押さえようとして、すぐにやめる。そのしぐさを見て、ウェインは彼女の体調が悪いことに感づいた、
「動かないなら、こっちから行くぞ！」
アストールはとにかく短期決戦ですませるつもりで、再びウェインに距離を詰めていた。
「あ、おい！」
何かを言おうとしたウェインは、繰り出される右に左にという大ぶりでも、隙のない細剣の振るいに防戦を強いられる。
アストールは生理痛と戦いながら、ウェインを確実に追い詰めていく。
ウェインは防戦を余儀なくされ、徐々に後ずさっていく。
その戦いぶりに周囲は歓声を上げて、双方を応援していた。
だが、それも一時のものだった。ウェインがアストールの振りを受け流すように見せつつ、大きく細剣を弾いていた。
アストールは予想しない動きに、姿勢を崩していた。
一瞬できた隙に、ウェインは剣を振り下ろす。

アストールはとっさにその場で態勢を立て直して、細剣で受けようとする。だが、とても真正面から受けきれるような一撃ではない。体を思い切りひねり、どうにかウェインの一撃を避ける。
だが、そこで体中に激痛が走っていた。
腹部からくる激痛が、ヘビがのた打ち回るように全身を襲う。
痛みで声もでず、アストールはその場に膝をついていた。持っていた細剣を地面に突き立て、体を支える。だが、それがやっとの状態だ。

「アストール。相当やばそう」

メアリーは心配でたまらなくなるが、どうする事も出来ずに彼女を見守る。

「ふむ。これまでかもしれん」

ジュナルは残念そうに首を左右に振って見せる。
ウェインは苦痛に耐えるアストールを見て、思わず彼女に駆け寄ろうとする。
だが、一瞬動きを止めて、彼は葛藤した。
今剣を向ければ、彼女に勝つことができる。だが、この様な状態の、しかも女性に剣を突きつけるなど、騎士道精神に反するものだ。
腹部を押さえたまま、立ち上がれないアストールを前に、ウェインは剣を構えたまま動かない。この奇妙な状況に、周囲は一気に興ざめしていた。

「おい！　何やってる！　ウェイン！　さっさと剣を突きつけろ！
それで終わりだぞ！」

ウェイン陣営からは野次が飛ばされ始めるが、彼自身なかなか決

心がつかなかった。

「おい！　何やってるんだ！？」

「あの新人騎士は馬鹿なのか？」

「ああ、勝てるのに……」

などと周囲からも罵声や野次などが聞こえてくる。

それにウェインはムッとして、その場で剣を放り捨てていた。

「この勝負！　最初から私の負けだ！」

ガラン！という石畳に転がる剣の音が、むなしく響き渡る。

「このエスティナ殿は、並半端な覚悟でこの勝負に挑んでいない！
その証拠に、彼女は体調不良であるにも関わらず、私との試合に挑んだ！」

ウェインはそう言うと、周囲に向かって叫んでいた。

「私は男である前に騎士である！　無抵抗な者に剣を向け、勝者を気取ることなどできない！　それに決意の固さでも、私は負けている……。これで剣を向けて、私が勝ったとしても、その勝ちはけして誇れる勝利ではない！」

ウェインはそう言うなり、アストールに近寄っていた。

「大丈夫か？」

ウェインはアストールの背中に手を回し、屈んで優しく話しかける。
だが、アストールは暫く何も喋らない。
口はプルプルと震え、痛みからか唇をかみしめていた。

「き、気安く触るんじゃねえ！」

ウェインの手を荒々しくのけると、アストールはそのまま細剣を支えに立ち上がる。
普通ならば喜んでもいいはずの勝利。だが、アストール個人としては、とても喜べるものではなかった。

女の体になったとはいえ、一度は王族に勲章を手渡されたほどの実力者だ。
ましてや、情けをかけられての勝ちなど、彼女（かれ）自身望んでいたことではない。
新人に情けをかけられ、逆にアストールの尊厳と誇りを傷つけていたのだ。
とても乙女の使う言葉と態度でないことに驚きつつ、ウェインはそれでもアストールの傍に居続けた。

「し、しかし、あなたは体の調子が悪いのでは？」

「気を遣いやがって！　何が騎士道だ！　負けは負けなんだから、俺にさっさと止めを刺せばよかったんだ！」

自分が女であることも忘れ、アストールはウェインに言っていた。
これほど屈辱的な勝利など、アストールは望んでいなかった。こんな勝ち方をするくらいなら、いっそのこと負けてしまっていた方がどんなに良かっただろうか。

アストールの元に駆け寄ってくるメアリーが、彼女(かれ)の肩を担いでいた。

「もう、馬鹿ね。だから、やめておきなさいって言ったのに！」

「う、うるさい！　棄権したら、どっちにしろ負けじゃないか！」

などというやり取りをしながら、二人は場外へと歩みだす。

二人の後姿を見たウェインは、その場で呆然と立ち尽くしていた。

「見事な騎士道精神だ。見ていてこれほど気持ちの良いものはない」

そう言ったのは現王の妃、ウェインの自分から選んだ敗北を称えていた。

元々騎士の国として栄えてきたベルムンティアで、これほど栄誉なことはない。ウェインは緊張の面持ちで、王妃の言葉を聞くのだった。

それとは相反して、アストールはその釈然としない勝利に、不満を持つのだった。

◆

「何！？　ウェインが自ら敗北しただと！？」

エストルは従者から報告を聞いて、驚きの表情を浮かべていた。

「は、エスティナ様が体調のすぐれない状態で出場し、膝を突いた時、ウェイン自らが敗者と名乗ったと」

エストルはその言葉を聞いて、拳を握り締めて怒りを露にする。
「まさか、あの馬鹿は！　その様なことにならぬために、あ奴を選んだのに！　本当に大ばか者だ！」
「しかし、王妃が栄誉ある敗北とウェインを称えております」
話の一部始終を聞く限りでは、負ける要素などなかった。だが、ウェインは自らを敗者と名乗ったという。
無抵抗な者に剣を向けることは、確かに騎士道精神にはそむくかもしれない。
だが、女の騎士代行など第一軍団では前代未聞で、仕来りを破るようなことは許されない。否、エストルは許したくない。
他の軍団なら早々に許したかもしれないが、代々すべて男手で軍団を運用してきた第一軍団をエストルは誇っていた。それが今、破られるのだから、怒り心頭なのも無理はない。
アストールがメアリーを従者として受け入れることさえも、反対していたのだ。
しかし、軍団長にはそこまでの権限はなく、渋々、メアリーが従者になることを認めざるを得なかった。
それが今度は騎士代行に女性がなるというのだ。
エストルはエスティオ・アストールに対する憎悪を募らせる。
以前は仲がよかったが、ある出来事をきっかけに二人の仲は犬猿の仲となっていた。今でも合えば、最低限の事務的会話以外はしないだろう。
「エスティオの疫病神め！　絶対に後悔させてやるからな」

そう呟いていたエストルの元に、なに者かが部屋をノックする。

「なんだ？　今は取り込み中だぞ！」

エストルはそう言うが扉の外の人物は、一向に立ち去る気配はない。

「エストル様、エスティナです」

美声が扉越しに聞こえ、エストルは余計に腹立てる。今の苛立ちの原因が、自分の元に来たのだ。不機嫌そうにエストルは、叫んでいた。

「今は貴様の顔など見たくもない！」

「試合の件で話をしにきました！」

アストールの声にエストルは、何かに感づく。これは何か言い知らせがあるのではないか？　と。鼻のきくエストルは、すぐに態度を変えていた。

「なに？　ならば入るがいい」

扉を開けてアストールが部屋に入ってくる。

綺麗なうなじに、そこからは女性らしい流線を描く胸、またそこから腰までの括れはとても魅力的だ。つくづく見ていて美人な妹であると、エストルは内心思いつつ聞いていた。

「して、話とは何か？」

「はい。先日の試合、私は納得いっていません。率直に言います。再戦をさせて下さい」

アストールの言葉にエストルは、内心ほくそえんでいた。

まさかこんなにすぐに、この女を追い出す機会が来るとは思っていなかったのだ。

エストルは部屋にいた従者に目配せする。すると、従者はそこから出て行き、部屋にはアストールとエストルの二人きりとなっていた。

「ふむ。確かに私も納得しておらん」

その言葉を聞いたアストールは、表情を明るくする。

「だが、王妃様がウェインを称えた以上、再戦をするなど、王族の顔に泥を塗るも同義だ」

その言葉をきいたアストールは、途端に表情を暗くする。それを見たエストルは、ニヤついていた。

「だが、先ほどもいったが、私も納得いっていないのだ」

エストルは企みを含んだ笑みを浮かべると、アストールを見つめる。

「どうだ？　非公式にもう一度再戦し、勝てば騎士代行を認めるというのは？」

どことなく怪しい提案に、アストールは怪訝な表情を浮かべてい

た。

「しかし、それでは。私が負けた場合の処置が、決まらないのではありませんか？」

エストルは口元をつり上げると、アストールに答えていた。

「どちらにしろ非公式であるから、気にする事はない。勝てばそのまま騎士代行につけばいいし、当然、負ければ、君から騎士代行を辞退する形にしてもらう。あの勝ち方で納得できないと言えば、自然な成り行きでもあろう？」

エストルのいうことに何ら不可思議な事はない。だが、どこか怪しく感じていた。

しかし、あの試合では納得できなかったのは事実だ。その再戦ができるのなら、アストールはその話に乗ろうと思い、口を開けていた。

「では、その条件で行きましょう」

アストールは自分の戦う相手の事を聞こうと、続けて口を開く。その前にエストルは、彼女（かれ）の言葉をさえぎるようにして言っていた。

「おっと、まだ、話は終わっていない」

エストルの笑みを見たアストールは、即座に何かあると悟る。怪訝な表情を浮かべたアストールに、エストルは得意げに言う。

「もう一つ提案がある」

「提案？」

眉根をひそめるアストールに、エストルはさも当然という風に言っていた。

「もしも、お前が負けても、この提案さえ飲めば、騎士代行を認めてやろう」

怪しげな雰囲気を出すエストルに、提案の見当を付けつつアストールは聞き返す。

「その提案というのは？」

「ああ、俺と一晩共にしろ」

あまりにも予想通り過ぎる答えに、アストールはため息をついていた。

「ああ～。そんなことだと思った……。失礼ですけど、あなたと寝るくらいなら、騎士代行になりません。それに、私は負けない！」

必死で男口調になるのを抑えつつ、アストールはそう言っていた。

「ずいぶんと威勢がいい。しかし、私が直接相手をするとなれば、そうもいくまい」

アストールはそのいい口に、腹を立てて言い返す。

「だれであろうと、ぶったおすまで！　あんたであろうと関係あるもんか！」

「ほほう。ではいいのですね？」

「なんでもきやがれ！」

いつの間にか男口調に戻っていたことに気付いて、アストールは内心焦っていた。

もしも、自分の正体がばれれば、それこそ、一生の恥というものだ。

「いいでしょう。試合はあなたが正式に騎士代行に任命される前日です。その日まで精々腕を磨いておくといい」

笑みを浮かべたエストルを前に、アストールは彼を睨みつけて部屋を出ていく。

そこでアストールは、ふと気づく。

エストルが自ら相手をするということに。

「ああ！　やば！　乗せられた！」

気づいた時には後の祭り、ウェインとの再戦も叶わない。

何より乗せられたことに、アストールは自分の不甲斐なさを感じざるをえなかった。

「あ～、もお！　こうなったら、何でもやってやる！」

半分やけくそに決意を固めたアストールは、自分の部屋へと戻るのだった。

傭兵と騎士代行

「で。その提案も前提に非公式試合を受け入れたってわけ？」

メアリーが腕を組んで呆れながらいうと、何も悪びれた風もなくアストールは答えていた。

「そういうわけだ。仕方ないだろうが！」

一度言ったことを覆すことを、アストールはよしとしない。

「どんな野郎が来ようと、今度こそぶっ倒す」

拳を手の平にぶつけて、自信にありふれた表情をするアストール。いつものアストールならば、とても頼もしく見えるのだろうが、生憎、今の外見は細身の美女である。どんなに強く見せようとしても、それが逆にか弱さを強調してしまう。

「で、負けた時はどうすんの？」

「だから、負けなければいい。それだけだ」

自分を追い込み、奮い立たせるやり方が、相も変わらず健在なことに、メアリーは溜息を吐くしかなかった。その姿がメアリーの目には儚く、そして、不安を感じさせるように映るのだ。

「ちょっと、勘違いしてない？」

「なにが？」

メアリーは眉根をひそめて、アストールに向き直っていた。そして、叫ぶようにアストールに言っていた。

「今のアストールは女なのよ？　なのに、勝てる勝てるって、前みたいに力のごり押しなんて、通用しないんだよ？」

メアリーの鋭い指摘に、アストールは黙り込む。そんなことは、当の本人が一番分かっている。だが、彼はそれを認めようとはしない。いや、認めたくなかった。

「アストールの身に何かあったらって思うと、心配でならないんだから！」

そうきつくいうメアリーに、アストールは思わず立ち上がって言い返していた。

「お前に俺の何がわかるってんだ！　俺は急に女に変えられて、わけ分らない中こうやって努力して！　俺のつらさがお前にわかるのかよ！」

きつくあたるアストールの顔は険しく、メアリーはその場で俯いてしまう。

「……じゃない」

「ああ？」

メアリーに対して聞き返したアストール。彼女はすぐに顔をあげ、大きな声で彼に言っていた。

「分かるわけないじゃない！　でも、私は、あなたが心配だから、こうやって……」

語尾の方が弱々しくなり、最後には彼女は目に涙を浮かべていた。

「私が、私が心配たしら、迷惑なの？」

一時の感情に身を任せて怒鳴りつけた事を、アストールは後悔した。メアリーがまさかここまで心配していたなどと、思いもしなかったのだ。

その場でぼろぼろと涙を零しだすメアリーに、ばつが悪そうにアストールは顔を背ける。

だが、今更ここで引こうにも、彼は引けなかった。

彼女（かれ）は自分が悪いと分かりつつも、変な意地が謝るのを邪魔する。

そして、逆にアストールはメアリーに対して、逆なでする発言をしていた。

「ああ、迷惑だ！　そのせいで試合に負けたら、どうしてくれる？」

思ってもいないことが、口から飛び出てくる。

その一言を聞いた瞬間に、メアリーはぐっと悔しさをかみ締めて、アストールから顔を背けていた。そして、涙を流しながら、その場を駆け出す。

「馬鹿！　わからずや！　そのまま、女で居ればいいのよ！」

そう叫んだあと、彼女は部屋から駆けて出て行っていた。

それと入れ替わるようにして、ジュナルが部屋に入ってくる。

「アストール。メアリーが泣いて出て行ったぞ？」

ジュナルが心配そうにアストールに聞くと、彼女は腕を組んでジュナルからも顔を背けていた。

「知るか、放っておけばいい」

何かしら喧嘩したのだろうということを察し、ジュナルは溜息を吐いていた。

「早めに謝りに行った方がいいぞ？」

ジュナルにそういわれ、アストールは子どもの様に背を向けて答える。

「俺は、悪くない……」

その言葉を聞いてジュナルは再び溜息を吐いていた。

自分に後ろめたしい事があるから、そうやって顔を背けているのだろう。そう言ってやりたくなるが、ジュナルは今ここでそう言うのは、逆効果であるのがわかっていた。

それが分っているからこそ、ジュナルはここでその話題を終わらせていた。

「そうか。それよりも、裏試合まで時間がない。最後の調整のために、もう一度アレクサンド卿の元に行き、細剣の扱いを教わってはどうか？」

ジュナルがそう言うと、アストールは表情を和らげていた。

「それも、そうだな。いいかもしれない。今の俺の構えは細剣を扱う構えじゃないしな」

アストールはジュナルの提案を、快く受けていた。

アレクサンド卿とは、アストールが騎士見習いの時に預かってもらっていた騎士である。彼に騎士道を教え、剣術を叩き込んだ師匠である。

今は一線を退き、山にこもって一人ひっそりと暮らしているという。

「もう二年も経つし、たまには顔を出さないと怒りそうだしな」

近衛騎士に任命されてから、この方仕事が忙しく、顔を合わせる暇もなかった。

だが、この機会にたまには顔を合わせるのもいいかと、アストールは考える。

「おぬし、もう自分の性別さえも忘れたのか？」

ジュナルはそう言って呆れながら、アストールに問い詰めていた。

「あ、そうか。俺は今、俺の妹ってことになってんだったな」

今更になってアストールは、自分が女であった事を再度認識する。

それと同時にメアリーが言ったことが、頭の中で思い出された。

『今のアストールは女なのよ？　なのに、勝てる勝てるって、前みたいに力のごり押しなんて、通用しないんだよ？』

その言葉はアストール自身、最も自覚していることである。
ジュナルに手渡された大剣は、あり得ないほど重く感じられた。あの大剣を扱うのに、手の豆を何度もつぶし、手には剣ダコが多くできた。
そこまでしてようやく自由自在に扱えていた大剣が、全く扱えなくなっている。
その力の退化のしように、アストールは絶望感さえ覚えていた。
だからこそ、早く男に戻らなければならない。けして、そのことを忘れていたわけではない。だが、男に戻らなければならないという焦燥感と苛立ちが、彼女(かれ)を余計に意固地にしていた。
だが、アストールは冷静になって考える。メアリーがどれだけ心配し、そう言ったのかを思うと、いても立っても居られなくなる。

「そんなこと、わかってるさ……」

アストールはそう呟くと、ジュナルに顔を向けていた。

「ジュナル、ちょっと用事を思い出した。さっきの話は後でしよう」

アストールの顔の変わりように、ジュナルは微笑を浮かべる。
彼女(かれ)の心境の変化を機敏に感じ取って、ジュナルは微笑んでいた。

「そうですか。では、後ほど」

そんなジュナルの微笑みを背に、アストールは細剣を片手に部屋を駆け出していた。

部屋を駆け出した後、メアリーは王城から飛び出していた。
既に日は暮れ始め、街中の街灯には火が灯りだしている。そんな中、涙を浮かべてメアリーは歩いていた。
王城から真っ直ぐに続くメインストリートから、少し外れたところには歓楽街が広がっている。昼間よりも夜中の方が賑わう、淫猥な世界だ。
この時間帯になると、酒場はその猥雑な世界の中にいかないとあいていない。
メアリーはまっすぐにその歓楽街の中へと、足を踏み入れていた。

彼女を見た男たちが、何やら笑みを浮かべて話しかけてくる。だが、例えどんなに容姿端麗な美男子がでてきたとしても、彼女は足を止めないだろう。喧嘩をして気分が悪いのに、男に声を掛けられると鬱陶しく、腹立たしいのだ。
メアリーは男の誘いの全てを無視して、普段王都に居る時に向かう酒場へと足を進めていた。

「何よ、アストールの馬鹿！」

酒場の席に着いたメアリーは、そう言って度数の高いコオルテというこの国独自の酒を煽っていた。

「人が折角心配してやってんのに！」

瓶からコップにコオルテを勢いよく移し、コップを煽って飲み干していく。

「おうおう、姉ちゃん自棄酒かい？」

そう言って絡んできたのは、数名のがたいのいい男たちだった。見た目からして屈強なという表現があうだろう。だが、その男たちの表情は、下品な笑みというにふさわしい。

「何か？」

メアリーは酔うに酔えないこの状況に、男三人を睨み付ける。

「こんな所で女の子が一人でいるなんて危ないぜ？」

そう言う男は断りなしに、メアリーの丸テーブルの席についていた。

「俺たちは王城付の騎士だ。お嬢ちゃんが危ないから、俺たちが守ってやるよ」

そう言ってもう一人の男が、メアリーの正面に座っていた。

「ああ、そう。それで？」

ろくでなしの騎士に絡まれ、メアリーは心底落胆していた、本当に王城付騎士ならば、自分たちを近衛騎士と名乗るだろう。特に自分のステータスを武器に、女に迫ってくる輩はそうだ。であるのに、近衛騎士と言わないところからして、下級貴族の二男、三男坊の寄せ集め騎士部隊の騎士と言ったところだろう。

騎士と言ったものの、その言動には品がなく、格式もない。
長男が家系を継ぐため、行き場のない二男、三男坊は、大抵、親のコネで何かしらの職業に就く。その中で最も多いのが、王立騎士である。
仕事内容は近衛騎士と違わないのだが、領地を継げない貴族の次男坊、三男坊の集まりと言うこともあってか多くの騎士がやさぐれている。

「つれないお嬢さんだね。俺たちみたいな騎士を目の前に、ここまで無関心な子は初めてだよ」

男はそう言って苦笑して、首を振って見せていた。そんな男の前でメアリーは内心毒づいていた。

（間が悪いんだよ）

人がせっかく酒を手に酔おうとしている所に、邪魔に入ってくる。それだけでも鬱陶しいのに、それが更に下級騎士のナンパときている。

「生憎、私は第一近衛騎士軍団の従士よ。あんたたちにかまってあげられるほど暇じゃないの」

メアリーは酒とコップを片手に席を立っていた。
挑発をしているかのような発言に、流石の騎士たちも気分を害していた。

「じゃあ、俺たちは同じ釜の飯を食ってるってことだろう？」

メアリーを追うようにして、一人の騎士が彼女の横に付いて歩い

ていた。
彼女はあくまでそれを無視し、店主のいるカウンターへと向かう。
「なあ、いいじゃないか？　俺たちと一緒に飲もうぜ？」
そんな誘いなど、メアリーにとっては願い下げだ。
「何回いえば気が済むの？　私はあんたらと飲むほど、暇じゃないの」
しつこく迫ってくる騎士に、いい加減飽き飽きしていたメアリーは、勘定をカウンターに置いていた。
「あ、大丈夫だって、俺が出すからさ」
そう言って男は自分の財布からお金を取り出して、店主に差し出す。どちらのお金を取ればいいのか分からず、店主は戸惑いながらメアリーを見ていた。
「あんたに奢ってもらう義理はない。マスター私のお金を受け取ればいいから」
メアリーは男を冷たくあしらうと、店を出ようと背中を向ける。そのときだった。男がメアリーの腕を掴んで引き止めていた。
「まあ、いいじゃないか。騎士の俺がおごるって言ってるんだぜ？」
笑みを浮かべた男の手を振り解こうとする。だが、騎士というだけあってか、力は強く振りほどけなかった。

「ちょっと、離してよ！」

「いいだろう。こっちに来て飲もうぜ」

男はそう言って彼女を手繰り寄せると、無理やりに抱え上げていた、

「ちょ、ちょっと何するのよ！　おろせ、おろせったら！」

そう言ってじたばたするものの、抱えあげられたメアリーは抵抗する間もなく、部屋の角隅の席に連れてこられていた。

そこの席に無理やりに座らせていた。

「さて、お嬢ちゃん。一緒に飲もうか」

満面の笑みで言う騎士たち、だが、実際のところ男たちは彼女に腹を立てていた。

あくまでも体面上は合意の上での飲酒としたいらしい。

「あんたたち、そんなだから、下級騎士とか言われるのよ！」

「な、なんだと！？」

「間違ったことといった？」

メアリーは毅然とした態度で言う。もちろん、騎士達は激昂していた。

「こっちが下手に出てりゃあ、やれ、近衛騎士の従士だ。下級騎士だ。全く以って腹が立つ女だぜ！　てめえがただの小娘ってこと教

えてやろうか？」

一人の男が立ち上がって、メアリーの背後に立つ。彼女はそれを警戒しつつも、前に座る二人を牽制するように言った。

「あんたたちそれでも騎士なの？　女を相手に三人がかりで、無理やり犯そうって？」

「はん！　関係ないな！　てめえはいっちゃならねえこと言ったんだ。そうなったって仕方ないだろう」

前に座る男はそう言ってメアリーの背後に居る男に目配せする。背後の男が動くのと同時に、メアリーは素早く横に飛びのいていた。羽交い絞めにしようとした男は、すぐにメアリーの方へと駆け寄る。

「女だからってなめないでくれる？」

素早く立ち上がったメアリーは、素手で構える。男は馬鹿にしたように笑うと、彼女に真正面から向かっていった。背の高さの差で言うならば、頭一つ分ほど相手の方が高い。

だが、メアリーはその小ささと素早さを生かして、男の懐に入っていた。

「んな」

そういった時には、その細い腕が男の腹下に食い込み、次に膝が股間に叩きこまれる。

泡を吹き出しそうになりながら、膝をついた男の首に、メアリーは両手を組んで作った拳を叩き込む。

早速一人の男が床に這い蹲り、余裕を見せていた残りの二人も真剣な表情となる。

「こうなりたくなかったら、次は二人同時で来てもいいのよ？」

余裕を振りまくメアリーに、男は苦笑して見せる。

「ほほー。流石は近衛騎士の従士というだけある。だがな、ここがどこか分かっているのか？」

そういった瞬間には、メアリーの後ろから一人の男が、彼女を羽交い絞めにしていた。

「な、なんなの！？」

「馬鹿だな。お前。ここの酒場、あんたが言う下級騎士が集まるってこと、忘れてたのか？」

いつの間にか酒場内にいた男たちの殆どが、彼女の周囲に来ていた。店主はそれを見て見ぬふりをして、食器を洗い出す。

「卑怯者！　放せ！　私は近衛騎士エスティオ・アストールの従士よ！？」

そう言った瞬間に騎士達は動きをとめ、互いに顔を見あわせる。流石は近衛騎士でありながら、歓楽街に入り浸っているだけあって、その名前の効果は絶大と、言ったところだろうか。

メアリーは安堵しようとした。しかし、それも束の間だった。

「ああ、あの黒魔術師を追いかけて、死んだっていう間抜けか？」

「そういえば、あいつ、最近見ないと思ったら、そうだったのか。死んだんなら、何もおそれることねえや！」

「むしろ、好都合じゃねえか、積年の恨み、この女で晴らしてやろうぜ！」

状況を好転させるどころか、一変して、更に状況を悪化させていた。普段、彼の名を聞けば、ここでは有名な「近衛騎士の喧嘩馬鹿」というあだ名で通っている。

喧嘩の強い彼を恐れて、誰も喧嘩をふっかけなくなったのが、つい最近だ。

だからこそ、使ったのだが、それも逆効果だった。ここではアストールが行方不明になっている事が、話が回りまわって死んだことになっていた。

迂闊な発言にメアリーは嘆息ついていた。

「へへ、じゃあ、俺が一番最初だ」

メアリーは自分の置かれている状況が、最悪の事態であることに気づく。それと同時に急に彼女の胸の内から恐怖心がでてきて全身を支配する。

男たちのいやらしい視線が、メアリーに絡みつき、彼女は嫌悪感を覚えていた。だが、助けは誰も来ない。

もうここで諦めるしかない。メアリーはそう自分を押し殺そうとした。

その時だった……。

傭兵と騎士代行　3

アストールは王城を出て、一直線に歓楽街に向かっていた。
メアリーとは何度となくこの王都ヴァイレルの歓楽街で、杯（さかずき）をかわしていた。彼女を連れて二人で酒の席を囲み、周囲からは恋人と間違えられることもしばしばだ。
二人の行きつけの酒場は、王立騎士達が入り浸っている場所だ。

だからこそ、アストールは心配でならなかった。
騎士とはいえ、領地を継げない捻くれ者の二男、三男坊ばかりが集まるところだ。
所詮は親の七光りで騎士になった、騎士としての心得もない者が多い。
そして、何より、メアリーはそれなりに美人であるのだ。
そんな不逞な輩が集まる場所に、一人で行っていれば逆にアストールが彼女の身を案じなければならい。
ましてや、もともと気の強い女性である彼女が、もめ事を起こさない保証はない。

「なんで、俺があいつを守らなきゃいけない！」

などと口汚く言うが、アストールの胸の内は不安で一杯だった。
歓楽街では王立騎士相手に、よく喧嘩を吹っかけられていた。当然、売られた喧嘩は買うのが、アストール流の流儀であり、一人で複数の相手を返り討ちにすることもしょっちゅうだった。

もしも、メアリーが自分の従者だと公言していれば、彼女の身がどうなるかわからない。
自分の身から出た錆で、彼女が傷つくことだけはさせたくない。
その思いがアストールの足を速めさせていた。
そうして、ようやくいつもの酒場の前に来る。
酒場は妙な雰囲気を出していて、覗き込めば奥の一角に騎士達の集団がいる。

「遅かったか！」

アストールはそう毒づきながらも、駆けて酒場の中へと駆けこんでいた。

「おい！　これは何の騒ぎだ！？」

凛とした女性の美声が酒場内に響き、一斉に男たちは入り口に目を向ける。
そこにはメアリーの希望の光の人物が佇んでいた。

「なんだ？　女がここに来るもんじゃねえぜ！」

長い金髪に凛々しくも優しい瞳、体の線に至っては攻撃的なグラマラスボディ。
明らかに外見は女性でも、メアリーにはアストールの男らしい佇まいがはっきりと見えていた。

「アストール！」

羽交い絞めされたメアリーは、彼女（かれ）の名前を叫んでいた。
一斉に男たちは顔を見合わせる。

「アストール？」

「あの、エスティオの？」

「まさか、あいつは一人っ子だろ？」

などと声をあげる騎士達、メアリーは不敵に笑って答えていた。

「エスティオは死んでない。今はどこにいるかわからないけど、あいつの妹のエスティナが、必ずエスティオを見つけてくれる！」

そう言ってメアリーはアストールに顔を向ける。アストールは場の動揺に便乗するかのように、言い放っていた。

「近衛騎士代行、エスティナ・アストール。お前たちのその卑劣なる行い、すぐに断罪してやる！」

腰の細剣を抜こうとしたその時だった。

彼女の手を重ねるようにして、何物かが細剣に手を添えていた。その手を見るなり、アストールはぎょっとする。

自分の手の二倍はあろうかというごつごつとした大きな手が、自分の手に添えられていたのだ。アストールは手を添えた人物を見あげる。

髭を生やした大柄な男で、静かに一言だけアストールに告げていた。

「面白いことをやっている……」

その大男は入り口を潜るようにして入ると、酒場の全員が息を呑

んでいた。巨漢というよりは、巨人といった方が体格的にしっくり来る。
それに加え、髭の生えたむっすりとした顔付きに、鋭い目つきが周囲を圧倒していた。
「……だ、だれだよ？　あれは？」
「し、知るか……。それよりも一体なんだ？」
騎士達は恐る恐る口を動かしていた。丸太の様な大きな腕には、無数の古傷が刻み込まれ、中には服の中の方まで続く深い傷痕も見える。
「……こい」
巨体の男はそう言うなり、騎士達の前で腕を構える。
騎士達は唾を呑んでいた。
男の構えに隙がなく、無闇に踏み込むことさえできない。それに加え、相手を睨み据えるその眼は、獣が獲物を狙う殺気さえ帯びていた。
何より男のその巨体が威圧感を倍増させ、酒場そのものが息苦しくさえ感じる。
「……お、お前がいけよ」
「い、いや、お前がいけ」
「始めたのはそこの三人だろうが！　お前ら三人がいけ！」
威圧感だけで騎士たちは怖気づき、その場で顔を見合わせたりす

る。
そして、誰もが擦り合う様にして、男の相手を決め始めた。
明らかに実力差があるのだということが、威圧されるだけでわかったのだ。
「こないなら、こちらから行くぞ……」
男はそう言って一歩踏み出す。かと思えば、次の瞬間にはその巨体からは信じられない速さで走り、一気に距離を詰めていた。
丸太ほどもあろうかという腕を横に薙ぎ払うと、次の瞬間には騎士たちが天井近くまで打ち上げられる。
そのでたらめな破壊力に、アストールは息をのんでいた。
（お、おれが元の体であったとしても、こいつと戦って、勝てる気がしないな……）
唖然として男を見ていたアストールだが、すぐにメアリーのことを思い出して駆け出していた。
メアリーを羽交い絞めにしていた男が、その場から逃げ出していたため、彼女は無事にアストールの元にかけてきていた。
「な、なんなのよ、あの男は？」
アストールの元に来るなり、メアリーは彼に聞いていた。だが、そう聞き返したいのは、アストールも同じだった。
「知るわけないだろう！　急に出てきたんだから！」
二人が目をやるころには、十人以上いた騎士たちの全員が床に突っ伏していた。

酒場の机は壁に刺さり、踏まれたのか気の床にめり込んでいる騎士もいる。
一言で言い表すなら、大惨事が起きた後、とでもいえばいいだろう。

「他愛もない奴らだ……」

巨漢の男はそう言うなり、二人に顔をむけていた。
思わず身構えそうになるのを、二人はどうにか押さえていた。意識するよりも先に体が構えそうになっていたのだ。
男に顔を向けられるだけで、殺されるのではないかと体を勝手に反応させていた。それだけ男の威圧感は異常だった。

「ここは危ない。早めに帰れ……」

男はそう言うなり、二人の前から立ち去って行く。
残されたのはめちゃくちゃになった酒場の一角と、昏倒している騎士たちだけだ。
二人はどう言葉を発していいのかわからず、立ち去って行く男の背中を呆然と見つめるのだった。

修行という名の……　1

「ってことが起きたんだが、ジュナル、男に心当たりはあるか？」

数日前に起きた酒場での出来事を、アストールは馬車の中で、事細かにジュナルに伝えていた。

巨人を思わせる体躯に、でたらめな腕力、そして、口数のすくなさ。それだけの特徴を言うだけで、ジュナルは大方の見当がついたらしく、馬車に揺られながら答えていた。

「その人物、私の予想ですと、コズバーン・ベルモンテという傭兵でしょう」

「コズバーン？　どこかで聞いたことある名前だな」

アストールはそう言って首をひねる。

「それはそうでしょう。この王国の西部遠征で名を馳せた有名な傭兵でありますから」

ジュナルは苦笑して見せていた。

「え？　そうなの？」

問いただしたのはメアリーで、アストールと同じくピンとこない様子だった。

「ええ。なんでも噂では、大剣を片手剣のように両手に持って自由

に振り回したり、自前の大斧で一度に二十人の胴体を真っ二つにしたりと、物騒な話題にかけることのない武勇の持ち主です。あ、そういえば、城門を体当たりで破壊したとか、そんな噂も耳にしましたな」

ジュナルは噂を信じていないのか、半ば楽しそうに言っていた。だが、そんなことを聞いても、実物を見るとあながち嘘ではないと思えてくる。

「実物を見ると、正直、噂が本当って思えてくるけどな」

アストールはそう言って苦笑する。大の男十数人を虫けら同然に吹き飛ばすコズバーンは、正に化け物というに相応しい。

「それにしても、その喋り方、どうにかならぬか？」

ジュナルは半ば呆れた表情で、アストールに目を向ける。

「どうにかならぬか？　って言われても、急に変えれるものじゃねえし、人前では女口調で居れば問題ないだろ？」

アストールの言葉を聞いたジュナルは、大きく溜息をついていた。

「普段からその口調で喋っていると、女性のかけらも感じられぬ……。それにボロが絶対にでるであろう」

ジュナルの言葉に、アストールはしばし黙り込んでいた。

「そうよね。私が女の子らしくしてあげようか？」

メアリーが横から楽しそうに言う。

「いやー、男勝りの女にいわれてもな……」

メアリーの提案を苦笑してアストールはやんわりと断る。

「少なくとも、あんたよりは女らしいと思うけど？」

「うむ。全くもってその通り」

ジュナルもメアリーに同意して、アストールは再び黙り込むのだった。

そうして、時間は過ぎていき、日の落ちかかった頃に、三人を乗せた馬車はある山岳地帯の麓で止まっていた。

「着きましたよ」

馬車の仰者がそう言って、三人の乗っている馬車の扉を開ける。

「ようやくか……」

アストールは背を伸ばしながら、馬車から降りて行く。女物のドレスを着ずに、動きやすいレギンスやボディラインを強調する服を着ている事が幸いしてか、さほどはしたなさを感じない。

それでも仰者はいい顔をしてはいない。

メアリーとジュナルはその様子を見て、呆れながらアストールの後に続いた。

馬車を降りるとただ広い平坦な敷地が広がり、その周囲を囲う森林地帯。その奥に屋敷にある小屋のような家が二棟と小屋が一棟建

っている。小屋の横には樹齢百年は優に越えるような大木もあってか、質素な小屋にも妙な神々しさがあった。
三人はその家に向かって歩き出していた。
家主も馬車に気づいたらしく、家から出てきて三人の方へと向かってくる。
家主は白髪交じりの壮年の男性で、体格のよさは男だった頃のアストールにも勝るとも劣らない。小屋のような家とは対照的な体格の壮年の男は、口の周りに髭を生やしている。
その顔で豪快に笑みを浮かべて、三人に向かって対面していた。

「ジュナル殿、メアリー殿、久しいな。良くぞこられた。話は伺っておるぞ！」

豪快な喋りは騎士とはとても思えない。だが、それでもこの男、アストールに騎士道を叩き込んだ張本人、アレクサンド・ストーナーである。
つい数年前まで、現役の騎士であったが、現役を退いて今ではこの辺境の山奥で静かに隠居生活を送っている。

「アレクサンド卿も変わりなくお元気そうで何より」

「はは、それで、この小娘がエスティオの妹という」

「エスティナ・アストールです。以後お見知りおきを」

左手を右肩まで上げて、膝を折って深々と頭を下げる騎士特有の挨拶をしてみせる。

「ふむ。エスティオと違って流麗だな」

アストールはムッとするのを抑えて、すぐにアレクサンドに向き直る。

「話は聞いている。まさかアストール家に隠し子がいたとは、わしもしらなかった」

アストールは師匠にまで自分を偽らなければならないことに、内心歯噛みする。

『どこから情報が漏れるか、わかりませぬからな。知っている者が少ないに越したことはありませぬ』

とジュナルが言っていた事からも、他人と同じように師匠を欺いているのだ。

しかし、それでもアストールはどうにか平静を保ち、アレクサンドを見て言う。

「はい。以前より兄上とは接しておりましたが、まさか、本当に兄妹だったことなど、つい最近まで知りませんでした。本当にどうしていいのかわかりません」

アストールの言葉は半分事実で、半分うそである。

どうしていいのか分からないというのは、完全に当てはまっている。

「立ち話も難だろう。さあ、豚小屋みたいな家だが、入ってくつろぐがいい」

アレクサンドはそう言うと三人を、自分の家へと案内していた。

王都から西に一日も馬車に揺られていれば、この王都郊外につく。

だが、そこから更に西に向かおうとするなら、長い距離の山道と深い森を抜けなくてはならない。
その入口がこのアレクサンドの家である。
アレクサンドが隠居生活にここを選んだのは、人があまり来ないから。ただそれだけだ。
家に入るとテーブルに案内され、三人は席に着く。
一応、元騎士らしく、客人用の椅子とテーブルは用意していた。
「さて、話の本題に移ろう。そこの生娘がワシに指導してもらいたいとか」
そう言ってアレクサンドはアストールを見つめる。その視線は厳しくも、どことなく温もりも感じられた。
「はい。ぜひご教授頂けたら、私としても幸いです」
アストールは普段の師匠の前では、絶対に出さない態度で願い出ていた。
「ふむ。まあ、それはいいとして、扱う武器はなんだ？」
「本人としては両手剣を望んでおりましたが、拙僧が細剣を使うように進めました」
そう言ってジュナルはアレクサンドに向き直る。
「ふむ。華奢な体では、精々片手剣を両手で振り回すのがやっとであろう」
納得したアレクサンドはアストールを見ると、微笑を浮かべる。

「そう気にする事はない。体に合った武器が、最もその人の強さを引き出すのだ。エスティナ殿はそれが細剣だったということだ」

アストールはそう言われて、今一つ納得できなかった。

今の今まで重い大剣を振り回してきた分、今更になって細剣を使いなおすことなど、アストールには屈辱以外のなにものでもない。

もちろん、アレクサンドの言っている事は正しいことに変わりない。

「少し、お手合わせ願おう。稽古をつけるのはそのあとでいい」

アレクサンドは笑みを浮かべると、立ち上がって、玄関横の立てかけていた剣を持っていた。アストールもそれにならって、立ち上がっていた。

そうして、全員が外に出ると、二人は向かい合っていた。

「いつでも好きな時にくるがいい」

アレクサンドは剣を構えることなく、佇んでいる。いつもと変わらない師匠のやり口に苦笑しつつ、アストールは細剣を抜いていた。

「では行きます！」

アストールはそう言うと真正面から、迷いなくアレクサンドに突っ込んでいく。

そして、彼の目の前まで来ると、上段から剣を振り下ろす。しかし、それをアレクサンドは、剣を鞘から抜いていとも簡単に打ち返す。

「細剣は振り下ろして斬るものではない。突くものだ」

そう言ってアレクサンドは、アストールに迫りよっていた。
じりじりと距離を詰めるのではなく、ずかずかとその巨体をアストールに詰めていく。
そのあまりにも無防備な距離の詰め方に、アストールは流石に焦りを覚えた。
他人を試すための一手段であるが、持っている剣は刺されば死ぬ。それを恐れない点は、流石は師匠といったところだろう。

アストールは改めて細剣を構えなおし、アレクサンドに向かって突きを放っていた。
アレクサンドは待ってましたとばかりに、その細剣を剣で大きくはじいていた。
宙を舞った細剣はアストールの手を離れ、地面に虚しく音を立てて落ちていた。

「正確ではあるが、単調な突き。弾かれればいとも簡単に剣が手を離れる。この程度では話にならん。途中構えを変えたようだが、全く持って動きは素人に等しい」

アレクサンドはそう言うと剣をしまっていた。
散々な言われように、アストールはすっかり気分を害していた。
なれない体に加えて、細剣という今まで扱ったことのない武器、そして、いつものような力が発揮できない苛立ち、全てが重なって、アストールを自棄にさせていた。

「まずは構えの練習からだな」

アレクサンドはそういうとアストールの前まで歩み寄っていた。

「明日からみっちりとこの儂が稽古をつけてやる。覚悟をしておけ！」

そうして、その日はアレクサンド卿の邸宅で、一晩を過ごすのだった。

修行という名の……　2

「構えが甘いぞ！アストール！　もっと脇を閉めて振り下ろせ！」

早朝から響き渡るアレクサンドの怒声に、アストールはその豊満な胸を揺らしながら素振りをしていた。

男の時と変わらない構え、アレクサンドを一度は認めさせたはずの構えのまま素振りをしている。だが、肝心のアレクサンドは何かしら難癖つけてくる。

「違う！　もっと力強く、そう上段から振り下ろすのだ！」

指示通りにするたびにアストールの豊満な胸は、ぷるるんと揺れる。

「何を食べたら、あんなに大きくなるのかな……」

メアリーはそう呟きながら、アストールの胸を凝視する。

「ふむぅ。やはり、遺伝的なものが大きいのではないかな」

誰も聞いていないが、そう言ってジュナルはメアリーに答える。

「……でも、今のアストールは魔法でああなってんだし、もしかすると、関係なかったり」

「そうであるといいが、生憎、アストールの母上もまた大きかったと記憶している」

「……そう」

元気のない返事をするメアリーに、ジュナルは微笑みながら言う。

「そう気を落とすでない。女性は胸の大きさで価値が決まるわけではない」

ジュナルの尤もな言葉に、メアリーは少しだけ気を取り直していた。

「そうね。まあ、気にしても大きくなるわけじゃないし、仕方ないか」

その卑屈な考えにジュナルは苦笑していた。

だが、そんな二人をよそ目にアストールに対する指示は、段々とエスカレートしていく。

「そう！　もっとだ！　もっと勢い良く。そう、次は片手で振り下ろし！　そう。そうだ！　もっと、もっと勢い良く！」

などと、型など崩れてただ勢い良く腕をふるって、段々と胸が揺れるのを見やすいような構えへと変化していく。流石のアストールも変に思い、ちらりとアレクサンドを見る。

剣を振る度にゆれるおっぱい。そして、それに釘付けになる師匠たるアレクサンド。アストールが目を向けたことにさえ気づいていない始末である。

アストールはそれに怒りを覚え、その手を止めていた。

「お。おう？　なぜやめた？」

怪訝な表情をするアレクサンドに、アストールはずかずかと歩み寄る。
そして彼の前まで来ると、アストールは睨みつけながら言っていた。

「おい、おっさん。さっきから妙に胸にばかり視線が行ってたようだが、どういうつもりだ？」

怒りの表情で言うアストールに対して、アレクサンドは白々しくとぼける。

「は、はて、なんのことだ？　わしはけして、お前のおっぱいを揺らして遊んでいたわけではない！　これはあくまでしゅぎょ、ブギャロ！」

そこでアストールは容赦なくその拳を、アレクサンドの顔面に叩き込んでいた。
鼻っ面をもろにたたきつぶされたアレクサンドは、即座に顔面を押さえる。

「な、急に何をするんだ！　老いた儂に暴力をふるうなど、レディのやることではない！」

清々しいほど開き直るアレクサンドを前に、アストールは怒りを抑えつつ発言する。

「おいおっさん。真面目に教えてくれねえと、帰るぞ？」

細剣の平たい部分で肩をぽんぽんと叩きながら、アストールは怒りと侮蔑の目でアレクサンドを見下す。

「こ、これはあくまで修行であってだな！」

「問答無用！」

アレクサンドの股間に見舞われるアストールの容赦ない蹴り。見事に入った蹴りにアレクサンドは、なんとも言えない悲痛な唸り声を上げてその場に崩れ落ちていた。

「いくら、師匠とはいえ、こうも真面目に稽古をつけてくれないとなると、容赦はしねえ」

再びアストールが剣の柄で殴りかかろうとする。だが、すぐにアレクサンドはその手を前に出して、必死に彼女（かれ）を制止する。

「わ。わかった。わるかった。儂が悪かった！　たしかに真面目に稽古を付けていなかったのは事実じゃ。じゃがな。儂の身にもなってくれ。ここにこもって早2年。女子と知り合う機会など皆無じゃった儂の身に！」

とんでもない言い訳に、アストールは柄を握ったまま殴りかかろうとする。

「ぎゃーーーわかった！　わかったわかったわかった！　ちゃんと稽古はつける！　だから落ち着け！」

必死に懇願するアレクサンドを見て、アストールは大きく溜息をついていた。

まさか、尊敬をしていた師匠がこのような変態親爺などとは、思ってもいなかったのだ。

かつて、アストールに騎士道を叩き込んだ時は、厳格であり、また、その中に優しさと偉大さを兼ね備えていた。本当に心の底から尊敬に値する威厳のある師匠であった。
それがいまや、若い女性のおっぱいを揺らして、それを観察するという。落ちぶれた行為に走っているのだ。

「はあ、まったくもって先が思いやられるぜ……」

アストールはそう言って細剣をしまうと、アレクサンドに対して釘を刺す。

「おい、おっさん。一度は自分で見るっつたんだから、最後まで見るんだろ？」

「あ、ああ、そのつもりだ」

顔を背けるアレクサンドに、アストールは顔を近づける。

「いつか言ってたよな。騎士に二言はないって？」

アレクサンドはその言葉に、ぎくりとする。

「はて、何のことかな？」

「騎士っていうのは、一度言ったことは必ずやり遂げる。そう教えたんじゃなかったか？」

そこでアレクサンドはふと疑問に思う。
この目の前のエスティナには、その様なことは一言も行った覚え

はない。であるはずなのに、なぜか、騎士見習いに教える自分の言葉を知っているのだ。

「ん？　お主、なぜ儂の言っていないことを知っておるのだ？」

怒りで我を忘れていたアストールは、ふと自分が妹のエスティナを演じるのを忘れていたことに気がついた。

一気に形勢が逆転し、今度はアストールが、バツが悪そうに言い訳する。

「さ、さあ、なんでかな。あ、そうそう。お兄様がそんなことを言っていましたのよ。おほほほほ」

急な態度の変わりように、アレクサンドは表情を怪訝なものに変えていた。

「ふ、ふむ？　まあ、そうか。それならよいが。とにかく、これからはちゃんと稽古をつける。これまでの非礼は詫びよう」

アレクサンドが完全に元の真面目な騎士に戻り、アストールはようやくひと安心する。

「そうこなくっちゃ。こちらこそ宜しく頼みます」

アストールはそう言って再び細剣を抜くのだった。

◆

王城のヴァイレルの近衛騎士団が駐屯する一角の建物。

真っ白い建物は三階建ての館に匹敵し、王城の中でも天守閣を除けば、次に目立つ存在である。その建物のなかの一室で、エストルは資料に目を通していた。
通していた資料はここ半年に王城に入ってきた物資のチェックリストだ。

「ふむ。これだけを用意しなくてはならんか……」

エストルはそう言うと、チェックリストを机の上に放り投げていた。

「全く、手の掛かることだ」

『まあ、まあ、そう言われなくともよかろう』

どこからともなく聞こえてくる初老を迎えようかという男の声、それに驚くこともなく、エストルは返事をしていた。

「これだけの物資を我が領地だけで用意するのは、流石に無理がある」

そう言って彼は握り締めている宝石のように輝く、手の平に収まりきらない大きさの深紅の珠に話しかけていた。

『ふふ。いずれはあなたもそれを使うことになるのですから、どうにかすべきではありませんかな』

初老の男はそのしゃがれた声で、エストルに意味ありげに言う。

「それもそうだが、金額も張る上に、この中には取引禁止の物まで

入っているではないか」

取引規制のしかれた物品はけして、市場に出回ることはない。それゆえに、裏では高値で取引される。もしも、その取引を当局に抑えられれば、地位はもちろん、命さえ危うい。

『気にすることはありませんよ。魔術師の研究材料として購入するといえば、貴族ならば誰でも手に入れられるものばかりですから』

男はそう言うが、エストルは表情を歪める。

「そうか。とはいえ、違法な物には変わりない。下手に購入すると、この今の地位から降ろされる口実となりかねんぞ」

『ならば、バレないようにすればいいだけではありませんか』

「な、貴様、私に密輸をしろというのか？」

愕然とするエストルに対して、男は言っていた。

『誰もそんなことは言ってません。ただ、バレないようにここに持ち込めばいいと言っているのですよ。あなたの優秀な魔術師を使ってね』

男の言葉を聞いてエストルは納得したように頷いてみせる。

「ふむ。そういうことか。ならば、できないこともなさそうだ」

『でしょう。では、私もあなたの領地へと向かうとしますので、あなたは一刻も早くそれらの物資をご用意ください』

男はそう言うと一方的に話を終わらせていた。それと同時にエストルの持っていた深紅の宝石は、ただの水晶玉へと変化する。
何の変哲もない透明で丸い水晶体。
この国で使われる高位な者しか扱えない通信媒体である。
人には多かれ少なかれ、人体の中に力が秘められている。それがこの球を通して力となり、遠くにいて同じものを持っている人間と会話できるのである。

ただ、作るのには洞窟に入り、混じりけのない一本の大きな水晶から削り出さなければならないため、とても高価な値段となっている。それゆえに一般庶民には全く無縁のものである。
エストルは無理難題をふっかけられて、頭を悩ませていた。

「たしかに出来ないこともないが……。全く、無茶ばかり言う」

エストルはそう言うと机の上にある鈴を手に取り、揺らしていた。

「およびでしょうか？」

開いた扉から音も無く現れた侍女。茶色い髪の毛に、鼻の当たりにそばかすのあるチャーミングなその女性を見てエストルは命令していた。

「仕事ができた。ソシエンヌ。お前に頼みたいことがある」

そう言ってエストルは、侍女ソシエンヌを呼びつける。

「はい。なんなりと」

「これから渡す資料に書かれたものを、我が領地に運び込んではくれないか？」

エストルはそう言ってソシエンヌに、先ほど持っていた紙とは別の紙を手渡す。

それに目を通したソシエンヌは、そのクリクリとした目を丸くしていた。

「こ、こんなに沢山の品物を、領内に運ぶのですか？」

「ああ。別段驚くこともないだろう。実験に使用する器具なんか、大したことなどないだろう」

エストルの発言を聞いたソシエンヌは、すぐに反論していた。

「そんなことありません。ガラス細工はとても高価なもの。それが実験に使用するとなると、かなり高価になりますよ？　それに大きな窯に鍋、まるで魔術師が必要とするようなものばかりじゃないですか？」

一方的に喋り続けるソシエンヌに対して、エストルは苦笑していた。

「俺からの切なる願いだ。頼むよ」

「もう、どうなっても知りませんからね！」

そう言って不服そうに従うソシエンヌは、頬をむすっと膨らませて部屋を出ていった。

彼女が怒るのも無理はない。なぜなら、彼女はエストルのこの出

張に際して、領地から金を受け取って、ここで彼のお金のやりくりしている張本人なのだ。
今回のことでかなりの出費となり、今ある資金だけでは到底買えそうもない。そのため、また領地より必要な資金をかき集めなければならないのだ。
その苦労を思うと、エストルはソシエンヌに頭が上がらない。

「すまないが、もう少し辛抱してくれ」

エストルの独り言は、部屋の中で消えていくのであった。

騎士と妖魔と傭兵と　1

ガベルの森、そこは深い森林に阻まれた未開の地。以前は変わり者の領主が、この未開の地に館を作って住んでいたが、彼が死んでからその館は空き家となっている。

そのガベルの森の中の館に向かって、アストール、ジュナル、メアリーの三人は足を進めていた。

進めど進めど、森は濃くなるばかりで、整備されていた道もいつしか、獣道のような細い道へと姿を変えていた。

木々によって遮られた光によって、足元の植物たちはろくに成長できないらしく、高くても腰あたりまでの草しか生えていない。

とはいえ、三人の体力を奪うには十分な濃さの草が、生い茂っている。

「アストール。本当にこの道であってるの？」

「ああ。以前、師匠に連れられて俺も行ったことがある。この道で間違いないはずだ」

元気よく返事をするアストールに、メアリーは大きく溜息をついていた。

「はてはて、どこまで正確なことか」

ジュナルはそう呟く。

「なんだよ。文句あるのか？」

「いえ、滅相もない。主人の言うことを信じられないわけがありませんからな」

ジュナルは皮肉とも言える言葉を、アストールに向けて放っていた。

「はどうせ、師匠に連れられても、何をしたかまで覚えてないんでしょ？」

それを言われたアストールは、言葉に詰まっていた。

なぜなら、師匠に連れられて来たときも、大剣の素振り以外にやっていなかった。そこの領主の名前さえも、覚えていない始末だ。

「図星〜？」

意地悪い笑みを浮かべたメアリーに、アストールは即座に答えていた。

「う、うるせえ！　あの時は、剣術覚えるので必死だったんだよ！」

アストールのその言葉を聞いて、メアリーも納得していた。彼らしいと……。

「それにしても、なんで、私たちだけなの？」

「さあ、な。師匠がそう言った以上は、そうするしかないだろ」

アストールはメアリーに答えて、事の次第を思い出していた。

それはアストールが剣の指南を受けに来て、一週間経過した昨日

のことだ。

◆

剣術の基礎も出来ていることもあってか、アレクサンドの下で指南を受けると、一週間ほどでアストールは細剣をそれなりに使いこなすようになっていた。

「では、次の段階に進むぞ。次は細剣を使った技の伝授だ」

細剣の形をした木剣をもったアレクサンドは、同じように木剣をもったアストールの前に立っていた。そして、彼に剣を向ける。

「では、エスティナよ。好きにかかってくるがよい。遠慮はいらんぞ」

「なら、さっさと行かせてもらう！」

アストールも剣を構えてアレクサンドに切りかかる。

上段から振り下ろされた細剣を、アレクサンドはいとも簡単に受け流す。だが、アストールはそれに対して、すぐに対応してみせる。

刃を滑り落ちた細剣を、そのままアレクサンドに突き立てようとしたのだ。

だが、アレクサンドも一筋縄で行かない。

アレクサンドは手首をひねって、細剣を下方に向ける。そして、すぐに左方向にアストールの剣を弾いていた。

それと同時にアストールの細剣を持つ手に、刃先を当てていた。

「今のでお前は剣を落とし、命までもを落としていた。この一連の動きがツバメ返しと呼ばれる私流の技だ」

「地味な技だな」

アストールはかろうじて相変わらずという言葉を押さえた。

「技というものはそんなものだ」

アストールの言葉に落ち込むことなく、アレクサンドはむしろ毅然としていた。

「さて、エスティナよ。見よう見まねでできる技だ。やってみるがよい」

そう言ってアレクサンドは、笑みを浮かべていた。

「無茶ばかりいう」

そう言いつつも、アストールもなぜか笑みを浮かべていた。アレクサンドと共に訓練に励む日々を思い出していたのだ。

来る日も来る日も、剣を打ちあっては悪いところを指摘され、改善して上達していく。基礎を習得して、ようやく技を教えてくれるのかと思いきや、さきほど言った言葉どおり、技を見せて真似をしろというのだ。

そのやり方が、全く変わっていないことに、アストールは懐かしささえ覚えていた。

時間はかかるが、確実に身についてくる。

とはいえ、このツバメ返し、大剣を扱うときにも習得させられた

技である。
剣が変わればやり方も変わってくるが、おおかた先ほどのやり方を見てアストールはできることを確信していた。
「では、行くぞアストールよ」
アレクサンドがその場で木剣を構え、対するアストールも彼を見据えつつ構える。
そうして、二人が動こうとしたその時だった。
遠くから聞こえてくる馬の蹄が地を駆ける音、それが二人の動きを止める。
暫く待っていれば、入り口付近に馬に跨った男がやってきていた。
「アレクサンド様！」
その男の身なりは、けしてわるくはない。シルクの服を着ていて、豪華に着飾っているところからすると、どこかの貴族といったところだろう。
「リアムか」
名前を呼ばれた男性は、馬から降りると慌てた様子でアレクサンドの元へと駆けてくる。
「アレクサンド様！　父上の屋敷が！」
「どうした？」
「コルドの群れに占拠されました！」

その言葉を聞いた瞬間に、アレクサンドの表情が険しいものとなる。

コルドというのは、人の形をした妖魔の一種である。浅黒い緑色の肌に筋肉質な体型、身長は人間とほぼ変わらない。主に十頭以上の群れで行動する。

また、知能は高くないものの、武器を使用して攻撃をおこなってくる最下級の妖魔である。アストールもコルド討伐任務を請け負って、何度か手合わせをしたことがあった。しかし、彼の振るう大剣の前では、その醜悪な姿を他愛もない肉塊へと形を変えていった。

手ごたえのない相手であったことを、アストールも覚えている。

とはいえ、戦闘の訓練を受けていない一般人からすれば、十分危険にかわりない。

「それで、群れの数は？」

「慌てて従者を連れて逃げ帰ったもので、よくはわかりません。ですが、少なくとも１０頭はいたはずです」

群れの数を聞いたアレクサンドは、腕を組んで考え込む。

アストールはそれに嫌な予感を感じ取っていた。

しばし考えていたアレクサンドであったが、すぐに表情を柔和なものへと変えていた。

「ふむ。これは丁度いい。エスティナよ。そなたが行ってくるがよい」

何をいいだすのかと思えば、アレクサンドはアストールに対してコルドを倒してこいといっていた。昔のアストールならば、面倒と思いつつも受けていただろう。

しかし、今は女の体である。はたして、以前のようにコルド達をばっさばっさと斬り倒すことができるのか。それが一番のアストールの懸念だ。

「し、しかし、いきなりすぎませんか？」

不安そうにするアストールを見て、アレクサンドは腕を組んでから小屋を見つめる。

「あそこにお前の優秀な従者がいるだろう。彼らを連れて行けばいい」

メアリーは狩りをやっていたこともあって、弓の名手に相応しい腕前を持っている。また、ジュナルはアストール家という貴族に仕える魔術師とあって、王国でも五本の指に入る相当な実力者である。

その二人を従者として従えるアストールも、かつては近衛騎士随一の大剣使いと言われていた。

まるで過去を懐かしむかのように、アストールは思い返す。

「で、でも、私と従者二人では……」

「１０匹程度なら、あの二人だけでも余裕を持って倒せよう。大丈夫だ」

アストールはアレクサンドの言葉に対して、何も言い返せなかった。結局、彼女（かれ）らはコルドの群れを討伐しに行くことになるのだった。

騎士と妖魔と傭兵と　2

アレクサンドの理不尽な依頼を思い出しつつ、アストールは森の中に見えてきた薄暗い建物を見て呟くように言う。

「お、館が見えてきたな」

アストールは細剣を抜いて襲撃に備える。

もはや、彼らのテリトリー内といっても過言ではない。もしかすると、今、正に奴らが襲ってくる可能性とてある。

「仕方ない。付き合うよ」

メアリーも腰にぶら下げていた弓をもち、背中にある矢を取り出す。そして、最も後方でジュナルが無言で杖をもって構える。

アストールはそれを見ると、前を向いていた。

「さっさと終わらせて帰ろうぜ」

「コルドの群れっていっても、前みたいに楽勝じゃない気がするんだけど？」

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるって」

メアリーの疑問に対して、アストールは細剣を片手に警戒しながら進み出す。

森の奥でひっそりと姿を潜める館の姿は、意外にも綺麗に保たれ

ている。
周囲を囲う石づくりの塀もそこまで汚れておらず、むしろ手入れが行き届いていて、まるで今まで人が住んでいたかのようだ。
また、塀の周囲は綺麗に草が駆られていて、人の手が加わっていることがすぐにわかる。

「どうやら、御子息は、この屋敷をとても大事にしているようですな」

ジュナルは手入れの行き届いた屋敷敷地を見て、そうつぶやくように言う。

「だとしたら、なおさら、コルド共をぶっ倒さないとな」

アストールはそういうなり、その場を駆け始める。

「あ、ちょっと、待ちなさいよ！　アストール！」

メアリーもまたその後に続いて、走り出していた。

「若さには敵いませんな。拙僧はあとから行くとしますか」

ジュナルは呆れながら、歩いて二人の後を追っていた。
もっと強い妖魔ならばジュナルも注意をしていただろう。だが、今回は最下級妖魔である。体が女性に変わろうとも、そこまで警戒する必要のない相手と判断していた。
ジュナルはこの時、見落としていた。
コルドは廃墟には住み着くが、手入れの行き届いた人の臭いのするところには近寄らないということを……。

アストールとメアリーは屋敷の門をくぐる。それと同時に目に入ったのは、噴水の水を飲む浅黒い緑色をした人型の生き物コルドである。
数匹が固まって噴水の水を美味しそうに飲んでいて、それ以外にも広い庭園を数匹のコルドたちが闊歩していた。

「メアリー頼むぜ！」

「任せて！」

アストールの一言に、メアリーはとりあえず目についたコルドに矢を放っていた。
一直線にコルドに向かって飛ぶ矢は、見事コルドの頭部を射抜く。
叫びを上げるより先に、その場に倒れる音が庭園に響いた。

「よし、次々！」

アストールの声にメアリーは次々と矢を放っていく。
二頭目を狩り終わった時、ようやく噴水のコルドたちが二人に気づいた。

「おし！　俺の出番と！」

いつもの調子でアストールは突っ込んでいく。
真正面から細剣を手に、コルドたちと相対する。
コルド達は武器をもっていないらしく，アストールを素手で殴りかかる。

「動きが鈍いんだよ。このどぐされ外道が！」

アストールは軽い身のこなしで一撃を避けると、すぐに細剣を振るう。
妖魔の腕を切り落とそうと、思い切り細剣を叩きこんでいた。だが、肉を切り裂くものの、芯である骨に阻まれて切り落とすことができなかった。
コルドの断末魔の叫び声が屋敷中に響き渡り、アストールは細剣をコルドのすぐにコルドの懐に入って細剣を突き立てていた。
「ば、バカ！　アストール！　これじゃあ、どんどん湧き出てくるでしょ！」
断末魔の叫び声を聞いたコルドが、他から湧き出てくるのは時間の問題だ。心配そうにするメアリーを他所に、アストールは更に攻撃を続けていた。
「んなこと知るか！　刺さなきゃこいつら死なねえんだからよ！」
アストールはなかなか息の根を止めないコルドに、細剣を何度も何度も突き立てる。そのしぶとい生命力に、アストールは息を荒げていた。
「ち、なんで、一匹倒すのに、こんなに時間かかるんだよ……」
アストールはようやく一頭のコルドを倒して、息を整えて細剣を構えていた。目の前には再びコルドが迫り、アストールも軽く身を避ける。
コルドと交差する時に細剣で斬りつけるも、その傷は深からず、浅い傷をつけるに終わる。致命傷は与えられなかった。
「畜生、いつもなら、もう5、6匹はちょちょいと倒してんのに！」

今のところ、戦果はアストールが一頭。メアリーがその間に既に四頭目を射抜いていた。全てとまではいかないが、庭園に出てきたコルド達の頭を正確に射抜いていた。
アストールも慣れない細剣で苦労して二匹目を倒し終える。

例え妖魔とはいえ、しぶとい生命力も頭をやられれば死んでしまう。だからと言って、アストールの細剣で、何度も頭を貫いていれば、確実に剣は傷んで最悪折れてしまう。
だからこそ、やむなく、何度もコルドの体の急所を狙って細剣の刃を突き立てていた。
その様子はとても綺麗とは言い難い。

「アストール。とりあえず、庭園の敵は片づけたけど、一旦引いて戻ったほうがよくない？」

メアリーは心配そうに言うと、アストールも息を整えて返事をする。

「そうだな。これはちょっと、ごり押しすぎだ」

男の体の時なら、とうに館内に突入して、残ったコルド達をばっさばっさと斬り倒して、肉塊の山を作っていただろう。
だが、今は女の体だ。二匹を倒すのに、かなり疲労していて、息を整えなければならない。それでいて、館内となると、自然と接近戦闘になる。
いつもならば、メアリーとジュナルを背にして、戦うことができただろう。だが、今の状態では、館内で出会ったコルドを相手にするのは一匹がやっとだ。
二人にサポートして貰っても、今のアストールには前に進むことに不安しかない。

「拙僧もその提案には賛成だ」

いつのまにか後ろに来ていたジュナルが、うなずいて見せる。

「ジュナル。遅いぞ」

「さっさと逃げましょう。あれを見てください」

ジュナルはそう言って館を指さすと、館からは溢れんばかりのコルド達がぞろぞろと出てくる。あるものは窓を突き破り、ある者は扉をけ破っていた。

その数おおよそ、５０は下らないだろう。

「おいおい、何が十匹だ！？　大群すぎんだろ！」

アストールはもはや、男口調であることを気にすることなく叫んでいた。

「さて、拙僧が時間を稼ぐので、お二人は先に行ってください」

ジュナルはそういうと、杖を横に構えて小さな声で呪文を唱え始める。

「ちょ、ちょっと。ジュナル？　何するつもり？」

一人残ろうとするジュナルに対して、心配そうにメアリーが問う。

「こういう時のために使う呪文です。巻き込みたくないのでお二人は早くお逃げください」

その言葉にアストールは納得して、すぐに足を館の外へと向けていた。

「ああ。あれを使うのか」

「え？　あれってなに？」

「メアリーは知らないんだったな。とにかく、今はにげるのが先決だ。行くぞ！」

訳も分からずにアストールに手を引かれるメアリーは、ジュナルの後姿を見据える。

彼の眼前には多くのコルド達が殺到しているのだ。

だが、それでもジュナルは何一つ動じる姿を見せない。

「万物の現象を司る力の根源の象徴よ。我が力をこの杖を通じて発現させよ。対象は目の前のコルドたちと屋敷一帯！　レグブリーカー！」

詠唱し終えると同時に、ジュナルを中心に大きな光が放たれていた。光の刃は彼を中心に全周に広がっていき、庭園にいたコルドたち全てを切り裂くように光っていた。

コルドたちは光が当たると同時に、その全部がその場に跪く。まるで太ももを何かに折られたようにガックシと膝をついていた。

彼の放った魔法は、一時的に攻撃対象を無差別に動けなくする魔法の一種である。

単体の動きを止めるのは、さほど難しいことではないが、これほどの数の妖魔の動きを同時に止めるとなると、そう容易くできるこ

とではない。
妖魔とはもともと、地下に住んでいた生き物が、地下にある魔力の結晶ともいえる鉱石、魔晶石の強い魔力を浴びて変化した生き物である。

そのため、地上に住む生物と違って、魔法という攻撃にある程度耐性があるのだ。
見習い魔術師程度では、自分の中にある魔力を最大限に引き出せないため、攻撃魔法はおろか、この拘束魔法さえも効かないだろう。
それをジュナルは何事もなかったかのように、平然とやってのけているのだ。
コルドたちがジュナルを前に跪いている様子は、正に圧巻と行ったところだろう。

「これで暫くは動けまい」

ジュナルは一人呟くと、アストール達を追って、屋敷の庭の出口へとかけていくのであった。

騎士と妖魔と傭兵と　3

「コルドの群れを一瞬にして足止めするなんて、相当な実力の魔術師ですね」

屋敷のカーテンより外を覗く一人の男が、愉快な笑みを浮かべて庭園をみていた。

そこには圧巻と一言で表せるほどの光景が広がっていた。

一人の魔術師が五十は下らない妖魔の群れを前に、跪かせているのだ。

「何やってるの？　さっさと調べるわよ！　昨日からずっと探し回っているのに、全然見つからないんだから！」

その後ろから一人の少女が険しい表情でやってくる。

見た目からして年齢は１４、５歳といったところだろう。まだまだ発育途中な、ある意味では魅力的な体のラインを強調した服に身を包んでいる。

「待ってください、時間はまだあるんです。騎士隊が来ていないのを見ると、もう一日くらい時間はありますよ」

男は不敵に笑いながら、少女を見つめ返す。

「はぁ、今度は食堂を探してくるわ」

呑気に構える男に対して、少女は落胆の溜息をついていた。

「食堂には何もないと思いますよ。あるとするなら、この館の主の書斎でしょう」

男の言葉に少女はきっと彼を睨みつけていた。

「あんた、最初からわかってたでしょ？」

「君は僕に場所を聞いてきませんでしたから、特に教える必要はないと思いましてね」

男はそういうと、机にかけていたローブをまとう。

「ちょ、ちょっと、本当にわかってたの！？」

少女は驚嘆と怒りの篭った表情を、男に向けていた。

「この館の中心にある書斎からは、最初から妙な魔力の流動を感じていました。あらかた見当はついていたんです」

「きいい！　何よ！　この性悪！　根っからの根暗！」

少女はそう言いつつ、男を睨みつける。だが、男はそれを意に介した様子も見せず、黒い羽根のついた帽子をかぶる。

「僕は根暗じゃありませんよ」

笑みを浮かべる男は、最後に机においていた赤い色の宝石のついたネックレスを首にかけていた。

「さて、書斎に向かいましょう。奴らを制御するのも結構疲れます

からね」

男はそういって一室を後にしていた。それに続いて少女も不機嫌そうに男の後に続くのだった。

◆

「何が１０匹だ！？　５０匹以上いたじゃない！」

アストールは必死で口調を抑えつつ、アレクサンドに対して怒鳴りつけていた。

「第一に！　こんなことになったのに、なんで騎士隊も呼ばないの？」

アストールにそう言われて、アレクサンドも困り顔のまま唇をへの字にする。

「そうは言われてもな。今の領主リアムが、なぜかそれを嫌がっているのだ」

「なんで？」

「わしに聞かれてもしるものか！　あやつはどうしても口にしたくないらしい」

アレクサンドの答えに納得できないのは、何もアストールだけではなかった。

あのあと、急いで三人はこの師匠の家まで逃げ帰ってきたが、なぜかアレクサンドは騎士隊を呼んでいなかった。
その理由として、アストールたちが軽く倒して帰ってくると踏んでいたからというのもあった。だが、アストール達から状況を聞いても、なお、騎士隊を呼ばないところを見ると、何か他に理由があると見ていい。
その理由を話してもらおうとしても、アレクサンド本人も知らないのだから、どうしようもない。

「チェ！　これじゃ、骨折り損の草臥れ儲けじゃないか」

アストールはそう言うと大きく溜息をついていた。

「そう落ち込むでない。神は我々を見捨ててはおらぬ。あれを見よ」

ジュナルはそう言ってアレクサンド邸の入口を指さす。
いつもならば、開け放たれている門が、何か岩のような塊が前にあって、ふさがって見える。だが、入口を塞いでいるのは、石でも岩でもない。

「な、なんだあいつは？」

アストールの問いかけに対して、アレクサンドは目をパチくりとさせていた。

「どうやら、人らしいが、まさか妖魔ではあるまいな」

アレクサンドがそういうのも仕方がない。
身長はおおよそ２ｍほど、ただ、背が高いだけならデグの棒といえただろうが、生憎、彼は横にも太い。大きくでたおなかに丸太の

ような太い腕と脚、手に持っているのは特注品なのだろう、今のアストールの身長と変わりない大きさの巨大な斧が握られている。
何より、全員の目が点になったのは、腰に下げている剣である。
アストールが普段使用していた肉厚な大剣を腰にぶら下げているのだ。巨体ゆえにその大剣でさえ、その大男からすれば片手剣に見える。

「あ、あれは、化け物か？」

アレクサンドは呆然と口を開けて大男を見て、呟いていた。

「ここに、エスティナ・アストールがいると聞いて、足を運んだ！」

地を鳴らすほどの大声が、四人の耳をつんざいていた。

「ね、ねえ。アストール。あれって酒場で見た男じゃない？」

いつの間にか横に来ていたメアリーが、彼の耳元で呟く。

「あ、そうだ……。絶対にそうだ」

熊の毛皮でできた鎧とも服ともいえないものを身に着けている大男を見て、二人はあの酒場での出来事を思い出していた。
腕をふるえば、4、5人の騎士が壁に吹き飛ばされ、片腕で投げられた騎士は天井に突き刺さり、踏まれた騎士は床にめり込む。
あの出鱈目な破壊力を持った大男を忘れるわけがない。

「な、何の用だ！　それ以前に貴様は何者だ？」

アレクサンドが怯みながらも、大男に対して叫び返す。

「失礼した！　我が名はコズバーン・ベルンモンテ！　傭兵だ！」

その名を聞いた瞬間に、ジュナルはなぜかぷっと笑っていた。

「ジュ、ジュナル？　なんで笑ってんの？」

「ん、いや、すまぬ。拙僧としたことが。あの出鱈目な武勇を思い出して、確かにあの男なら実際にやりかねぬと思うと、な、つい笑いが出てしまったのだ」

メアリーは怪訝な顔をしつつ、この男の笑いのツボが今一つ理解できないでいた。

コズバーンはその巨体をアレクサンドの敷地内へと入れていく。そのさまはさながら、山が動いていると表現しても過言ではない。一歩踏み出せば、地鳴りがし、小さな木なら踏み倒してしまうだろうという巨体だ。

そして、アストールの前まで来ると、彼女の前で斧を地面に立てて、その巨体で座り込んでいた。それと同時に、アストール自身が地響きで、地面から足が離れたような気がしていた

「エスティナはどこにおるか！」

アストールの名を叫ぶコズバーンに一同が、彼女に目を向ける。

コズバーンは全員から視線を向けられている女性が、アストールであることに気づいた。そして、一言だけ彼女（かれ）に言っていた。

「そうか、お前がエスティナか！　我を雇え！」

だが、アストールとて目的も何もわからないこの男をいきなり雇

うわけにもいかない。

「あ、あんたの武勇は聞いているわ。で、でも、なんでいきなり私の所にきたわけ？」

コズバーンはアストールの問いかけに対して、しばし考え込む。そして、一言だけ告げていた。

「貴様の兄、エスティオと手合わせするためだ」

アストールはその言葉に、顔をひきつらせていた。なにせ、この大男が探しているエスティオこそが、目の前にいる女性、エスティナであるのだ。

「……あ、あら、そうなの」

引きつる表情を隠せずに、アストールは呟くように言っていた。

「もし、断ると言ったら？」

どこからともなくやってきたジュナルが、コズバーンに問う。すると、コズバーンは大斧を手に立ち上がり、アレクサンド邸の敷地に生えている大木の前まで行く。

樹齢１００年は下らないだろうという大木は、アレクサンドの質素な小屋の横に生えている。その幹の太さはあの巨体をもったコズバーンよりも一回り大きい。

コズバーンは木の前まで来ると、その大斧を大きく振りかぶって、叩きつけていた。

とてつもない木が破裂するような炸裂音とともに、木が軋んで倒

れていく。
そして、最終的に二つの小屋とも家屋とも言えない質素なアレクサンドの主屋を、押しつぶして倒れていた。
「ぎゃあああ！　儂の家がああああ！！！」
絶叫するアレクサンドは、その場に項垂れる。彼とて元は一介の騎士、その実力差を認識できないほど愚かではない。ここでコズバーンに切りかかっても、結果は見えている。
絶望するしかないアレクサンドは、そのまま頭を抱えていた。
そんなアレクサンドをよそに、毅然とした態度でコズバーンは叫んでいた。
「今、実力は示した！　断る理由はないはずだ！」
そういう問題じゃないだろ。と言いそうになったが、アストールは喉奥でそれを止めていた。断わった時のことを考えると、命の危険を感じたのだ。
「アストールよ丁度良いではないか。力自慢の一人や二人が、メンバーにいたほうがよかろう」
ジュナルの言葉に対して、ありゃあ力自慢の領域を超えて、化け物クラスだろ。とも言えず、アストールは渋々コズバーンを雇い入れるのであった。

騎士と妖魔と傭兵と　4

小屋をぶち壊されたアレクサンドは、早速アストール達を追い出すように館へと向かわせていた。
それがコズバーンに対する当てつけであると分かっていても、アストール達には拒否する権利はない。なにせ、雇った以上は、コズバーンの責任は雇い主の彼らの責任でもある。
アストール達は渋々来た道を戻って、先ほど追い返された館へ来ていた。

「てわけで、また来たわけだけど……」

アストールはそう言って、目の前の出鱈目な光景に口を開けて呆然と見つめる。

「どうやら、拙僧らの出番はなさそうですな」

ジュナルも笑みを浮かべてその光景を見つめる。

「あの武勇、マジだったのね」

呆れた視線をメアリーがコズバーンに送っていた。
三人の目の前に広がる光景それは……

「どうした！　その程度か！」

大声で叫ぶコズバーンは愛用している特注の大斧を振り回す。

それだけで飛びかかってきていたコルドの4、5匹の胴体が宙に舞う。

「ムハハハ！　雑魚！　雑魚！　雑魚！　雑魚おおおお！」

コルド達はそれでも戦意を喪失せずに、次々にコズバーンに向かっていく。だが、コズバーンはそれをいとも簡単に、力でねじ伏せていく。

大斧を振るえばコルドたちが粉砕され、隙をついてかかってきたコルドを腰の大剣でまっぷたつにし、ついには倒れたコルドを、虫を殺すかのごとく踏み潰す。

生粋の戦闘狂でありながらにして、鬼人を超えた化け物の様な破壊力を見せつける。

「ムハハハハ！　もっと強いものはおらぬのか！　私を満足させてみせろ！」

そう叫んでいる間にも、次々とコルドたちを肉塊へと変えていく。

五十はいたコルドの群れが、瞬時にして半分に減っていた。

だが、コルドという妖魔は繁殖力が強く、もとより外敵が侵入すれば、例え最後の一頭になってもかかってくる性質を持っている。

それゆえにコズバーンに、残りのコルドたちは臆することなく殺到していた。

「我が大斧、バルバロッサも泣いておるぞ！」

そう言って目の前に立ちはだかるコルド十頭を、一挙に大斧バルバロッサで肉塊へと変えていた。

「にしても、あの噂が本当であったとは、っぷ、いかん。笑ってし

まった」

またしてもジュナルは妙な笑いのツボを披露する。それに呆れの視線をメアリーとアストールが送っていた。

「まあ、気にするでない。人の心は面の如しというではないか」

ジュナルの言葉に対して、なぜか笑う気にもなれず、二人はコズバーンを見つめていた。

その野蛮で、しかし、また男気感じる戦いぶりに、見惚れることこそないが、しびれるものはある。だからと言って、ジュナルのように笑う所はない。

コズバーンを相手にしているコルド達に、同情さえ覚える。

その凄惨を極めた戦いは、ものの数分もしないうちに終結していた。綺麗に整備されていた庭園は、コルドたちの肉塊が散乱した凄惨な現場へと姿を変えていた。

「この程度か。つまらぬ！」

コズバーンはそう言うと、最後の生きた一頭の首を掴み上げると、そのまま握力だけで首の骨を折っていた。それでもまだ息があるのが、妖魔である。

絶叫をあげるコルドをその場に叩きつけると、そのまま巨大な足で頭を踏み潰していた。

そう、本当にぺしゃんこに。

「エスティナよ。　ここで待とう」

あっという間に五十頭はいた妖魔の群れを倒したコズバーンは、物足りないと言わんばかりに武器をしまってその場に座り込む。

そして、大斧についた肉片と血を、おもむろに懐から取り出した何かの動物の皮で拭き取り始めていた。

「もはや、どちらが妖魔か、拙僧には区別がつきませぬな」

最下級とはいえ妖魔は妖魔、生命力は普通の人間よりもはるかに上だ。だが、コズバーンは瞬時にそのコルド達を始末していた。

そのでたらめな破壊力にアストール達は、呆れ半分に感謝せざるをえなかった。

「まあ、雇って正解と言えば、正解だったのか」

アストールも出す言葉がなく、ただ呆然と肉塊の散らばる庭園を見つめる。

「そうね。さっさと行きましょ！　手間も省けて楽ちんよ。あとは館の中に残ってないか確認するだけだし」

意外にメアリーは切り替えが早いらしく、すぐに答えて二人の前を歩み出していた。

「確かにそうであろうな。行くぞエスティナよ」

ジュナルもそれに習って、頭を切り替えて歩み出す。

「仕方ない。行くか」

アストールも館に向かって、足を踏み出していた。

◆

「そんな馬鹿な……」
黒の帽子をかぶったローブの男は、唖然としながら呟いていた。
「どうしたの？」
その男に対して、書斎の本棚を弄りまわしていた少女が問いかける。
「いえ、その信じられないかもしれませんが、コルド達が全滅しました」
「え？」
「たった今。僕の魔力で制御していたコルドの最後の一匹の反応が消えましてね」
男はそう言うと大きくため息をついていた。
「こんなに早く騎士隊が駆けつけるなんて、僕は聞いてませんよ。にしても、手際が良すぎます」
男はそう言いつつも、手を止めることなく書斎の本棚の本を次々と押しのけていく。
ばさばさと音を立てて床に落ちていく本たち。
軽く小さな図書館くらいはありそうな、その広い部屋の中で、二人は同じように本棚を探っていた。
「で、妖魔が居なくなったら、次も用意してるんでしょ？」

少女が不安そうに聞くが、男は黙々と作業を続ける。その表情は固く、そして、微妙に焦っているようにも見えた。

「え？　もしかして、ないの？」

信じられないと少女が言うと、男は苦笑しながら答える。

「用意してないこともないですが、とんでもないことになりますよ？」

少女は男が何を言いたいのか、瞬時に察したらしく、また不機嫌な表情になる。

彼はこの屋敷を、自身の持っている魔晶石の強大な魔力を行使して破壊しようというのだ。

「馬鹿！　そういうのは段階的に上げていくものでしょ！　なんであんたは白か黒の両極端なの！？」

「それは君のパンツの色のことですか？」

「はいはい。現実逃避しない。すぐに敵が来るんだから、さっさと入口見つける！」

少女は男の扱いに慣れているというよりは、そのセクハラ発言を諦めているらしく、書斎の中を更に乱雑に荒らし出す。

男もそれに倣って、急いでそこらの書物を放るなどして調べ出していた。

そうして、幾拍か探し続け、ようやく、お目当ての物を見つけ出していた。

「ありましたね。さて、行きますよ」

「ええ、さっさと終わらせましょう！」

二人はそう言って、書斎の奥の方へと消えていくのだった。

屋敷と領主と秘密　1

蹴破られた屋敷の扉を前に、アストールは細剣を片手に警戒しながら突入していた。

「見た感じ、全部出てきたって感じだが、油断はできねーな」

アストールはいつもの口調のまま、館の廊下を見渡していた。

コルドたちが住み着いたせいか、ひどく荒らされている。

ベニヤの壁は剥がされ、階段や廊下の手すりは破壊され、床には至るところに穴があいている。また、豪勢なシャンデリアもエントランス中央に、無残に落ちていた。

「あ～あ。もったいない」

見た目だけでも高価そうな骨董品が、そこかしこで割られ地面に転がっている。それを見てメアリーが溜息をついていた。

「清々しくなるくらい、破壊しつくされておりますな」

ジュナルはそう言うと、その酷い館の状況を見て呟いていた。

「ああ。全くもって、さて、進むとすっか」

アストールはそう言うと、そのスタイルのいい足で踏み出していた。

「ねえ、別れて調査しないの？」
後に続くメアリーがそう提案するものの。
「だめだ。念には念を入れて、三人で行動するのが一番だ」
アストールはそう言うと、足を止めることなく館の中を散策しだしていた。
食堂に客室、応接室に主人の部屋、その他侍従の部屋などを順々と巡って行くが、一向にコルドの残りがいる気配はない。
どこの部屋も荒らされているものの、部屋の隅々まで確認してもコルドはいない。
回っているうちにも、段々と日が暮れていく。そうして、最後になったのが、この館の主人の書斎である。
「さて、多分、何もないとは思うが、一応、見るだけみとかないとな」
アストールはそう言って書斎へと足を踏み入れていた。
書斎に足を踏み入れた時、三人がまずある印象を抱いた。
何か違和感があると。
館の一般的な書斎とは、大きければ一階と二階を吹き抜けにして、階段をつけて書斎内を自由に行き来できるようにしている。それがこの国での伝統的な作りである。
しかし、奇妙なことに、この書斎は一階から穴を掘って地下に吹き抜けを作っている。
確かに日の光を与えずに、適度に本を補完するにはいいが、地下では光が足らず、本を読むのに苦労するだろう。
何より奇妙なのは、書斎の主人の机が地下の中央の広場におかれ

ていることだ。
これでは、日の光など望めないし、本を読む時は暗いロウソクの火の明かりで読まなければならない。日中から好んでロウソクの火を使って読書など、相当な変わり者だろう。

「なんか、ここもひどく荒らされてるわね……」

周囲を見渡したメアリーが呟くように言っていた。
本棚からは本が散らばるようにして、床に散乱している。相当数な本がここに保管されているらしく、散乱した本も種類は様々だった。

「よほど、熱心な読書家であったのであろう」

ジュナルは感心しながら、足元に落ちていた本を拾い上げる。
そこでジュナルは眉根をひそめていた。

「どうした？」

ジュナルの変化に気付いたアストールは彼に聞く。

「いえ、これを見てくだされ」

そう言って差し出してきた本を、アストールも見る。その本を見て、アストールも眉根をひそめていた。

「体と魔術のバランス研究？」

本の題名を読み上げるアストールは、怪訝に周囲を見回して他の本も手にとっていた。

「禁断の魔術書？」

ただの貴族が読むにしては、おかしい本である。それ以外にも散乱している本を拾い上げてみると、魔術関係の書物が多くあった。

「貴族でいながら、魔術の研究をしていましたのかな」

貴族は騎士あがりの者や、領地を収めるにあたって武術を心得ている者が多い。というよりは、貴族の嗜みの一つとして武術が重視されているのだ。

それは単に民衆に対して、強い領主ということをアピールするだけに留まらず、いざ戦争が始まれば領地を、命を張って守るという決意の表れでもあるのだ。

そんな貴族が魔術の研究をするなど、これまた奇妙な話である。確かに予備知識として知っておいて、損はないだろうが、ここに置いてある膨大な本の中には、実戦に用いることができる書までもが入っている。

知識として蓄えておくには、大袈裟なほどの書物もおいているのだ。これではまるで、この書斎で何かを研究していたかのようだ。

「何か臭うな」

アストールはそう呟くと、書斎の階段を駆け下りていた。

「アストール！　気を付けて！　何があるかわからないわよ」

メアリーが心配そうに叫んでくるが、今の彼女の耳には届いていない。

何より、彼を突き動かしていたのは、この館に対する不信感である。
だだっ広い庭は常に綺麗に保たれていて、あたかもそこに人が住んでいるかのような美しさだった。
だが、この館の主はとうの昔に死んでいて、その息子が庭園や館の手入れをするのも、月に一度といったところだ。それでは、あの綺麗さはとてもではないが、維持できない。
何よりも、この館で魔術の研究をしていたとなると、わざわざ人気のない森に館を建てたことも納得が行くというものである。

「絶対に何かある」

アストールはそう言って地下の書斎の本棚を見渡していた。
散乱した本たち、だが、奇妙なことに本棚は倒されていても、それ以上の傷は見当たらない。妖魔ならば無意味に本棚を破壊していてもおかしくないはずである。

「おかしいな……」

アストールは本棚を片っ端から見ていく。どこの本棚も同じように綺麗なまま、本だけが床に散乱していた。

「ん？　あれは？」

アストールの目に留まったモノ、それは本の散乱していない本棚であった。
地下の壁を隠すように配置された本棚、本が整然と並んでいれば不審にも思わなかっただろう。だが、その一角の一つの本棚の本だけが散乱していないのだ。

「まさか！」

アストールはある一つの考えに至って、その本棚に駆け寄っていた。

そして、本棚の本の一列を上から順々に、押したり引いたりとしていく。普通の本が並んでいて、一冊一冊動かせるようになっていた。

そうして、最後に一番足元に近い本の列を押したときだった。

一冊の本を押したはずなのに、その列の本すべてが奥に進むようになっている。

その奇妙な現象に、アストールは力いっぱいにその本の列を押していた。

本棚の奥でガチャリという音がし、突然、本棚が音を立てて床に向かってに下がり始めていた。

「やっぱりか」

アストールは自分の考えが正しかったことを、これで確信していた。

「ほほ、どうやら、また、見つけたみたいですな」

いつの間にか後ろに来ていたジュナルが、笑みを浮かべてアストールに言っていた。

「みたいだな。まあ、こんな辺鄙な森に住んでるんだ。隠し部屋の一つや二つあってもおかしくないだろ」

「それだけではあるまい？」

ジュナルの意地悪い笑みが向けられ、アストールは嘆息していた。
「ああ。予想だと、多分、魔法の研究でもしてたんじゃないかってな。だったら、どこかに秘密の研究室みたいなものの入口がどっかにないかとも思ったんだ」
アストールはそう答えると、開ききった秘密の扉を見つめる。薄暗い階段には火が灯り、地下へと続く階段が見えていた。
「やっぱり、灯りがともっていやがるか」
「先客が居るのが、わかってたの？」
不思議そうに聞いてくるメアリーに対して、アストールは平然と答えていた。
「大方、誰かが居るってのは、すぐに分かったさ。他とは荒らされようが、違うからな」
「え？」
「見てみろ。本棚なんか形を残してるし、本は散らばってても破れかぶれになってない。妖魔なら本棚ごと破壊しててもおかしくないのにな」
そう言われて見ると、メアリーも納得が行った。
ほかの場所では給仕の服はビリビリに破られていたり、執拗に細かく陶器が割られていたり、食器棚は棚ごと破壊されていたりと、散々な荒らされようだった。

だが、この書斎は彼女の言うとおり、荒らされた形跡はあるが、あそこまでひどく陰惨に破壊し尽くされてはいない。

それがなぜなのか。今となってはすぐに分かることだ。

誰かがここにきて、この館の秘密を探っていた。

何者かは判らないが、とにかくこのまま進めばわかることだ。

「皆、気を付けていくぞ」

アストールはそう言うと腰の細剣を抜き、地下へと足を踏み出していた。

屋敷と領主と秘密　2

アストール達は武装を整えて、地下に続く階段を下りていた。しばらく行くと長い直通の廊下に出る。その先には開け放たれた石造りの扉があった。

とても大きく、人力ではとても開けられそうもない分厚く重そうな両開きの扉だ。それが人力で開けられるとするならば、あのコズバーンくらいであろう。

「魔術師がいるか……」

そのことに気付いた三人は、この先に魔術師がいることを暗に感じ取っていた。

コズバーンの様な化け物が、そうそういるわけがない。というよりも、いてはたまらないものだ。

ここの主人が魔術の研究をしていたということは、この扉も何らかの魔術で閉まっていたことに間違いはない。とすれば、必然的に魔術師がこの先にいても、おかしくはない。

「皆、警戒して行くぞ！」

アストールは後ろの二人を見ると、戦闘態勢を整えて、扉の向こうへと駆けこんでいた。

三人は無言のまま駆けこむ。その先にはかなり広い空間が広がっていて、足音だけが部屋中に響き渡る。

「思ったよりも、到着が早かったようですね」

ロウソクの灯された薄暗い部屋の奥から、若い男の声が聞こえてくる。まるで、三人がここに来ることが分かっていたかのような態度で、その暗闇より姿をあらわにしていた。
顔半分を黒い布で覆い、騎士が普段つける様なつばの広い帽子をかぶっている。また、その帽子も黒で、帽子の上部には黒い鳥の羽がついていた。
全身を隠すように身に着けているマントも黒であり、とにかく全身を黒で統一した怪しい装束の青年だ。

「その恰好……。貴様、黒の魔術師か」

ジュナルが険しい表情のまま、青年を見つめる。その青年が目元だけでも、かなりの美青年というのが分かる。
黒の魔術師といえば、巷を震わせる禁断魔法を研究する秘密結社である。
非人道的な研究、たとえば、人体実験などを平然とやってのける。騎士隊がいる街中でも平気で黒魔術の実験を行い、多くの人々を犠牲にした事件さえあった。
そんな魔術師がここにきているのだ。この館の主が、なんらかの禁断魔法を研究していたのは間違いないだろう。

「ほほう。やはりお知りでしたかね」

青年は目元に愉快そうな笑みを受かべて言っていた。

「禁断魔法を研究するなど、言語道断である。この近衛騎士付魔術師が貴様を成敗してくれる！」

そう言ってジュナルは容赦なく杖を構えて、呪文を詠唱しようと

する。だが……。

「ま、まま、待ってください。僕たちはあなた方と争うつもりなど、毛頭ありません」

黒の魔術師はそう言うと、大げさに両手をぶんぶんと振っていた。

「第一に僕は無駄に人を殺したりすることが嫌いなんですから！」

青年はそう言うと、身構える三人の前に足を踏み出す。

「それに、ぼくは自分の手を汚したくありませんからね」

三人はそれでも警戒を解くことなく、身構えたまま青年を見つめていた。

油断ならないのは、その物腰の柔らかい独特の雰囲気を感じ取ればわかる。

「そう固くならなくてもいいですよ。僕は、何もしませんから」

黒の魔術師はそう言って更に一歩前に踏み出していた。

「ジュナル、どうする？」

アストールは青年の態度に戸惑いつつも、警戒を緩めることなくジュナルに聞く。

「油断するでない。奴は黒の魔術師だ。何をしてくるか分かったものではない」

そう答えられ、アストールは握る細剣に力を込める。
その時であった。

背筋を撫でるようなぞっとした殺気を感じ、アストールはすぐにその殺気の放たれた方へと顔を向ける。
そこから何かが光ってみえ、アストールは反射的に剣を構えていた。そして、その迫り来る何かをたたき落としていた。
カラカラと音を立てて、床にナイフが転がる。それがすぐに投擲専用のナイフであることを確認したアストールは、ナイフが投擲されてきた方向を睨みつけていた。

「ちぇ！　勘のいい女ね！」

その声の主は、ゆっくりと暗闇から出てくる。

「な、子ども？」

メアリーがそう言って、暗闇から出てきた少女を見て呟いていた。

「ふふ。私の外見に騙されない方がよくってよ。ナイフを叩き落としたのは褒めるけど、次はないと思ってね」

笑みを浮かべる少女は、どこからともなく取り出した投擲用ナイフを指の間に挟む。

「全く、しくじってしまいましたか」

黒ずくめの青年は、半ば呆れた様子で少女に言う。

「るっさいわね！　あんたこそ、さっさと仕事を終わらせたら？」

少女のその声音に、青年は目元に意地悪い笑みを浮かべたまま言う。

「そうですね。では、あと頼みますよ」

「え？　一人で三人相手にしろっての？」

「そんなわけないでしょう。ちゃんと助っ人はつけますよ。大地の力を司りし力の根源よ。我が力を通じて、ここに召喚せん！　いでよゴーレム！」

青年が短く叫ぶ間に、その場に二体の人型の石が床を突き破って現れる。まさかの展開にジュナルも眉根を潜めていた。

「これは先手を打たれましたな」

ジュナルは苦笑するしかなく、すぐに魔法を詠唱しだす。

「万物の現象を司る力の根源の象徴よ。我が力をこの杖を通じて発現させよ。全ての物を傷付け、我が意にそぐわぬ物を破壊せよ。ブラストストーム」

そう発言すると同時に、ジュナルの前方より突風が発生して、少女とゴーレムに吹きつける。

少女はその場で危機を感じ取って、即座に身を翻して横に飛びのいていた。

突風がゴーレムに当たった瞬間に、突風と共にその場で細かな小石や砂がゴーレム達を襲う。

何も見えなくなる砂嵐のような現象に、少女は唖然としていた。

数瞬のうちに風は吹き終え、ゴーレムはそれでも二体その場に佇んでいる。
だが、よくよく見れば、ゴーレムの表面は傷まみれで、自重を支えきれなかった腕がもげて地面に落ちていた。
「あ、あぶな！　あんなのに巻き込まれたら、怪我だけじゃすまないじゃない！」
少女はそういうと、腰から短刀を引き抜く。
「てか、なんで、ゴーレム三体ださないのよ！　これじゃあ、私が戦うの決定済みじゃない！」
などと叫び声をあげる少女、それにアストールは容赦なく細剣で襲いかかっていた。
少女はそれに対応して、短刀で振りおろされた一撃を受け止める。
「仕方ありませんよ。僕の魔力も無限大というわけではありませんからね。余力くらいは残さないと、あとがどうにもなりません」
「性悪！　悪魔！　根暗！」
アストールの剣劇を、少女は片手の短刀で全て受け流す。男に対してそう毒づいていた。アストールはそれが自分をなめている行動とみて、腹を立てる。
「おい、てめえ！　俺を舐めてんのか！　よそ見してんじゃねええ！」
そう叫んでアストールは、隙をついて細剣を繰り出す。しかし、

それを少女はいとも簡単に、短刀ではじいていた。

「だって、たいしたことないじゃん」

笑みを浮かべる少女は、次に守勢から一気に攻勢に出ていた。
アストールの一撃を短刀ではじき返すと、即座に短刀を前方に突き出していたのだ。
その一撃を軽く弾いたアストールだったが、少女はいつの間にか反対の手にナイフを持っていて、そのナイフがアストールを襲う。

辛うじてナイフを避けるも、次には短刀の一撃が迫ってきていた、右に左にと飛び交うナイフと短刀の一閃に、アストールは防戦一方の戦いに引き込まれていた。完全に相手ペースの戦い。
どうにか攻撃は防いでいるものの、防ぎきれなかった攻撃もあった。
少女の襲い来る牙が服を切り皮膚にまで刃が達し、腕や足に浅い切り傷を作り始める。
そんな状況に嫌気がさしたアストールは、ナイフが繰り出された一瞬の隙をついて細剣を横から凪いでいた。

だが、そのアストールの大振りの隙をつき、少女はその小柄を生かして彼女の懐に迫る。
対応できない速さではないにしろ、懐に入られたことに変わりはない。
少女の繰り出したナイフが胸に迫っていた。
助けてもらおうにもジュナルとメアリーは、ゴーレムを倒すことに必死で、助けに行くことはできない。

ここは自力でどうにかするしかない。アストールは全身の筋肉を無理に使い、無理矢理に細剣を少女に向ける。相打ち覚悟の一撃に

気づいた少女は、即座に身を翻す。

「へー。攻撃は三流でも、意地だけは一流なんだ」

少女の愉悦に浸る笑みを見たアストールは、それでも何も言い返せなかった。

細剣という慣れない武器で訓練したとはいえ、一週間そこそこではその実力もしれている。何より大剣を使っているときの癖が、未だに抜けきっていない。

それは本人が最も自覚しているところで、何を言われても仕方がないのだ。

「るせええ！　人を馬鹿にするのもいい加減にしろ！」

だが、言われっぱなしで黙っている性格でもない。アストールは叫ぶと同時に、少女に向かって細剣を振るっていた、

「あーこわいこわい。年増の女の嫉妬って怖いわ！　実力差に嫉妬かしら？」

笑みを浮かべる少女は、軽々とした身のこなしで全ての攻撃を避けていく。

「さて、そろそろですよ。マリーナ、行きますから逃げてください」

青年の声が室内に響きわたり、少女ことマリーナは不服そうに言い返していた。

「もうちょっと、遊ばせてくれてもいいじゃない」

青年はマリーナを見て、溜息をついていた。何といっても、青年の言葉に従うつもりがないらしく、未だにアストールの剣戟を避けては、時には受け流しているのだ。
それを嬉々とした表情で行なっているのだから、青年も呆れる以外にない。

「ふぅ！　こっちは終わったわよ！　アストール！」

メアリーがそう叫び、ゴーレムの一体を矢で蜂の巣にして倒したことを報告する。

「こちらも終わりましたな！」

ジュナルも魔術によって、ゴーレムを粉々に粉砕し終えて報告する。

「あらら！　もう倒しちゃったの！？　ケニー！　どうにかしてよ！」

マリーナがそう叫ぶと、青年ことケニーは溜息をついていた。

「だったら、早くこっちに来てくださいって」

ケニーがそう言うと同時に地面が大きく揺れ出す。

「騎士隊が来るのも、時間の問題です。ここはさっさと退散したほうがいいですよ。それに……」

青年の後ろからは、大きな塊が地を揺らしながら迫ってくる。そして、彼の横を通り過ぎると、薄暗いロウソクの光に照らし出され

てその塊の全貌が明らかになった。
コズバーンよりも一回り大きな体躯の、人型魔道兵器。通常のゴーレムよりもかなり大きい人型のゴーレムが彼らの前に現れていた。
全身を石で作られた巨体には、なにやら古代文字らしいミミズのような文字が、全身に刻まれている。
鎧を着たような兵隊を型取っていて、そのしなやかな動きには目を見張るものがある。

「な、なんなの、あいつは……」

メアリーが呆気にとられていると、その鎧を来た石の巨人はアストールと。マリーナと呼ばれた少女のすぐ後ろに迫っていた。
そして、二人に向かってその太い腕を振り下ろしていた。
即座にその場から飛びのいて避ける二人。たまたまアストールはその巨人よりも遠くに逃げることができ、マリーナの飛び退いた位置は丁度巨人の足元当たりだった。
石の巨人は自分の近場にいたマリーナに標準を合わせたらしく、彼女に向かって更に追撃をかけていた。
マリーナは軽やかな身のこなしで避けると、ケニーに叫んでいた。

「なんで、なんで私を攻撃するのよ！」

「いや～。すみません。コルドの制御に、ゴーレム二体の召喚と、このギガントスの起動で、こいつの制御に必要な魔力を使いきっちゃったんですよ。だから、起動はしたんですけど、制御はできないんです」

情けないケニーの声に、マリーナは大きな声で罵倒していた。

「この愚図！　愚鈍！　役立たず！　馬鹿！　鬼！　悪魔！」

そう叫ぶ間にも次々と、その巨体からは信じられない速さの攻撃がマリーナを襲う。
どうにか攻撃を避けるマリーナを見て、ケニーはまるで他人事のように叫んでいた。

「どうにか、自分で切り抜けてくださーい」

「ふざけるなあああああ！」

マリーナの悲痛な叫びが、部屋中に響く。
それを見たアストールは大声を上げて、指をさして笑っていた。

「あはは！　間抜けだろ！　バカだろ！　お前ら！」

大声で笑い声をあげるアストール。それに呆れるジュナルとメアリー。
だが、世の中。野次馬がそう傍観し続けられるほど甘くない。
アストールの笑い声に気付いた制御不能の巨大ゴーレム、ギガントスは、その体躯をゆっくりとアストール達に向けていた。
その隙にマリーナは部屋の奥、青年のいる場所へと駆けていく。

「馬鹿はあんたでしょ！　自分で気を引いてどうするの！？」

大声で叫んでくるマリーナに、再びギガントスは青年の方へと体を向けていた。

「ではでは、僕達はこれで失礼しますよ。後はそのギガントスと存分に戯れてください」

青年はそう言うと、少女を抱きかかえる。ギガントスは逃げたマリーナの後を追って、走っていた。そして、二人の頭上からその拳を振り下ろしていた。
だが、真上から襲い来る拳に、二人は全く動じる様子もない。
次の瞬間にはギガントスの拳が、土埃を上げて、地を割って叩きつけられる。だが、そこに二人のペシャンコになった肉塊は見当たらなかった。

「ふむ。どうやら、転送魔法を使用したようですな」

ジュナルが呑気にそう言う。

「ここは逃げたほうがいいか」

アストールは苦笑しつつ、足を踏み出していた。
だが、そうそう簡単に見逃してくれるほど、ギガントスも容易な相手ではない。標的を見失ったギガントスは、すぐにアストール達に標的を変えていたのだ。
巨体がゆっくりとアストール達に向くと、三人は引きつった笑みを浮かべる。

「ア、アストール。あんたのせいで、こっちに気が向いたじゃない！」

メアリーが横にいるアストールを睨みつける。

「ばかやろう！　俺だって好きで呼んだわけじゃねえ！」

「二人とも言い争っている場合ではありませぬぞ！　ここは一旦、地上まで引きますぞ！」

ジュナルの声に二人はすぐに口論をやめる。そして、迫り来るギガントスを背に、地下の出口へとまっしぐらに走っていくのだった。

屋敷と領主と秘密　3

（ふん、全くもって手応えないわい）

コズバーンは内心そう毒づきながら、自分の作り出した惨劇の中大斧を毛皮で磨き続けていた。

生まれもってきたその大きな体を生かし、南方の森の中で一人樵をして暮らしていた。

時には王立魔術師からの依頼で、魔術の材料となる御神木とも呼ばれている大木を切りに行ったこともある。

樹齢百年を超える純度の高い魔晶石の取れる山に生えた、人が十人輪になっても囲いきれないような大木を、魔術師たちは御神木と呼んでいる。

その御神木でなければ、魔術を発現させるための媒体の杖は作られないのだという。

そういう巨大な木は、大抵は普通の木よりも数段も丈夫であり、普通の斧では切り倒すのに2、3日はかかる。

そこでコズバーンは、街一番の腕利き鍛冶屋にこの特注の大斧を作らせていた。

ただ単にどんな巨大な大木でも、切り倒せる大斧が欲しかっただけだった。

そんなある日、彼にも転機が訪れていた。

それが西方遠征に来た王国軍のガイドという、単なるアルバイトである。
樵で生活に困らない程度の金額のお金は儲けていたが、来る日も来る日も木を切り続ける毎日だ。いい加減コズバーンは木を切ることに飽きていたのだ。
だが、街で見かけたガイド募集の広告を見て、刺激を求めるためにコズバーンは早速王国軍に仕官していた。
そうして護身用に大斧を持って、戦場に出たのが運のつきだった。
敵方はまっ先にガイドたるコズバーンに、攻撃を集中してきたのだ。
それもそのはず、騎士達よりも数段は大きい体躯のコズバーンと相対すれば、誰であってもそれが敵の猛者であると勘違いするだろう。
腹を立てたコズバーンは、かかってきた敵をいとも簡単に大斧でねじ伏せていた。
そこで彼は思ったのだ。

（我が力がどこまで通用するのか。一度試してみるか！）

コズバーンはガイドでありながら、戦場の第一線で常にその戦斧を振るい、ある時にはその巨体で簡素な砦を破壊したりと、次々と武勇を打ち立てていた。
そうして気が付けば西方の大巨人として恐れられていた。
だが、彼はそれでも満足していなかった。戦場に出てくる兵隊で、対等に彼と渡り合えるような猛者はどこにもいなかったのだ。
結局、戦場に飽きたコズバーンは、自分よりも強い猛者を探して、王国内を流浪の旅に出ていたのだった。

そして、最初にターゲットにされたのが、エスティオ・アストー

ルである。
王族付第一近衛騎士団にて、どんな騎士にも負けなしの武勇を誇っていて、歓楽街でもその喧嘩の腕っ節は有名で、時には拳闘大会にまで出場するほどの喧嘩好きという。
それでいて、妖魔退治などの評判もよく、王国内で今最も強い男の一人であるという根も葉もない噂が流れていたのだ。

「ふふ。儂が必ず見つけ出し、この腕を試させてもらおうぞ！」

大斧を吹き終えたコズバーンは、そう呟くと立ち上がっていた。
ふと屋敷に目を向けると、屋敷の入り口からエスティナ達三人がコズバーンの方へとかけてきていた。
慌てた様子で、表情もどことなく焦っているようにも見える。
ヒゲと揉み上げで毛むくじゃらな顔を、更に顰めさせるコズバーンは、なぜか胸の高鳴りを覚えていた。
こういう状況に限って、彼を期待させる何かがあるのだ。
戦斧を構えるコズバーンは無表情になって、三人を待ち構える。

「コズバーン！　逃げろ！　やばいぞ！」

エスティナの叫び声を聞いたコズバーンは、不敵な笑みを浮かべる。そう、やはり、彼を期待させる何かがあるのだ。
三人が彼の元に来たときだった。突然屋敷の正面玄関が吹き飛び、一階から二階の壁に大きな穴を空けて巨大な人型の物体が出てきていた。
コズバーンよりも一回りも二回りも大きな物体、それは鎧を着込んだ兵隊の様な格好をしている。

「は、早く！　逃げるわよ！」

メアリーがそう言ってコズバーンの手を取って引っ張ろうとする。だが……。
彼はそこから動こうとはしない。
「な。何やってんのよ！　行きましょうよ！」
あまりに巨大な敵を前に、コズバーンは恐怖しているのか。動くことができないのかと思って、メアリーは彼の顔を見上げる。
だが、それは彼女の見当違いだった。怯えるどころか、コズバーンはニヤニヤとしながら、全身を身震いさせていた。
「グワハハハ！　これだ！　これを待っておったのだ！　さあ、覚悟しろ！」
嬉々として活快な笑い声を上げると、コズバーンはそのままギガントスに向かって駆け出していた。
さながら、自分の獲物を見つけた獰猛な猛獣が、一直線に駆け出すように。
ギガントスの前まで来ると、早速その大斧を奮っていた。真横から振り回して胴体をまっぷたつにするつもりで振り込んで行く。
大きな音と共にギガントスが、少しだけ宙に浮きあがり、再び地面に足をつく。ギガントスの胴体の三分の一まで、大斧の刃が食い込んでいた。
「……ば、馬鹿な。あれは魔導兵器で、そう簡単に、普通の武器では傷つけられないものなのに、そんな出鱈目な」
ジュナルは呆然とその光景をみたあと、再び自分の目を疑う。
突き刺さった斧を抜こうとするコズバーン。だが、刺さった斧を気に介した様子を見せないギガントスは、即座に拳をコズバーンに

振るう。
顔面をギガントスの腕で強打され、コズバーンは堪らずその場に膝を落としていた。それでも、吹き飛ばない所が、彼のずば抜けた天性の才能というものを感じさせる。
何より、その手が斧から離れることはなかったのだ。

もう一度、今度は両手でコズバーンに対して攻撃が振るわれる。その直後、カッと目を見開いたコズバーンは、両手を斧から放して真上にあるギガントスの両手を合わせるように握っていた。
そして、あろうことか、魔導兵器たるギガントスと力比べをしだしたのだ。

「な、なんだよ。あいつ、本当に人間なのか！？」

アストールは空いた口が塞がらず、その信じられない光景を呆然と見つめる。
見る限り、ギガントスとコズバーンの力比べは、ほぼ互角だ。

「ムオオオオオオオオオオオオオオ！」

地を震わせる大男の叫び声が、庭園に響きわたる。
顔を真っ赤にしたコズバーンは、徐々にだがギガントスを押していく。

「あれじゃあ、どっちが魔導兵器か分かんないわ」

呆れ果てたメアリーが、大きく嘆息する。

「手出し無用おおおおおおお！！」

訳の分からない奇声を発するコズバーンは、そのままギガントスを力でねじ伏せていた。
ギガントスが体重を掛けている足を、コズバーンは片足で器用に払ってみせる。
すると、ギガントスがバランスを崩して、その場に倒れ込んでいた。
倒れるのを確認する間もなく、コズバーンは素早く大斧を胴体から引き抜く。そして、ギガントスが立ち上がるよりも先に、大斧を真正面から振り落としていた。
地震が起きたかのごとく、大きな地鳴りと共に庭園が、屋敷全体が揺れていた。

それから、幾度も幾度も、その行為が繰り返される。
バスンとも、ドスンとも、ズドンともつかない鈍い音が、何度も響く。
そして、ようやく、大斧を振り下ろすのを止めたときには、地面に原型をとどめていないギガントスが横たわっていた。
辛うじて人型なのは認識できたが、それ以外に確認できるものと言えば、体を構成している材質の石というくらいだ。

「ムハハッハハッハ！　これほどまでに強い敵にであえたのは初めてだわい！」

満足そうに笑うコズバーンは、斧を大地に立てて大声で笑い始めていた。
魔導兵器からの攻撃を受けても、唇を切る程度の負傷で済んでいる。唇の端から垂れる血をコズバーンは舌で舐めとると、そのまま、踵を返していた。

「我が雇い主。エスティナよ！　このような敵に合わせてくれるの

であらば、そなたを我が主として認めようではないか！」
にんまりとする巨人を前に、アストールは引きつった笑みを浮かべていた。
「し、仕方ないわね。あなたを従者として認めるわ。でも……」
アストールはそう言うと、コズバーンの後ろを指さして更に顔をひきつらせる。
「あいつ、まだ倒せてないみたいよ」
アストールの言葉にコズバーンは振り返る。そこには先ほど原型を留めないまでに、破壊し尽くしたはずのギガントスが立ち上がり始めていた。
ボロボロだった表面が、砕けちった破片を吸い上げて修復していっている。そして、元の姿へと戻るのに時間は掛からなかった。
流石のコズバーンもそれを見て喉を唸らせる。
「ぬぅ……。殺したりなかったか」
アストールはそういう問題じゃないだろうという言葉を、喉の奥で止める、
コズバーンは再び斧を持って、ギガントスに対峙する。
「おい、ジュナル！　どうなってんだよ！？」
アストールが慌てた様子で聞くと、ジュナルは顔を険しくして答えていた。

「魔導兵器は純度の高い魔晶石を原動力として動いています。そして、その原動力たる魔晶石を破壊、もしくは、本体から取り除かないかぎり、破壊しても何度でも蘇ります」

ジュナルの言ったことに、アストールとメアリーは大きく溜息をついていた。

「じゃあ、あいつの起動源の魔晶石をどうにかしないと」

メアリーは心配そうに、コズバーンに目をやる。とはいえ、当のコズバーン本人はあからさま戦闘を楽しんでおり、善戦している。

繰り出された石の腕を大斧で受けると、力で押し返す。かと思えば、そのまま大斧を振り下ろしてギガントスの頭上に突き立てる。

だが、斧を抜けば、たちまち、破損箇所は修復されていく。

コズバーンは戦いの面では圧勝しているが、ギガントスの破損修復能力もそれに引けをとらない。

「ええ、コズバーンはいずれあの兵器に倒されるでしょう」

魔導兵器ギガントスは、当初コズバーンの攻撃を受け続けていた。だが、少しずつ学習していっているのか、その攻撃を時折、防ごうとするようになっていた。

振りおろされた大斧を、腕で受ける。だが、その腕はいとも簡単にボロりとまっぷたつになり、本体まで大斧の刃が突き刺さる。

「て、言っても、あいつが負ける気がしないのは、俺だけかな？」

アストールはその出鱈目な強さを見て、苦笑していた。

「私もそう思うんだけど、実際はどうなの？」

メアリーに聞かれてジュナルは、苦笑して答える。

「あれほどの巨体を動かす純度の高い魔晶石です。動かすだけでも相当な魔力を使っているはずです。それが、修復にまで回っているとするならば、勝敗が少しわからなくなってきましたな」

コズバーンの攻撃が受けるたびに、大きな傷の損傷を修復していく。いくら純度の高い魔晶石といえど、兵器を動かしつつ修復することは相当な魔力の消費だ。

ようはコズバーンの体力がつきるのが先か、それとも、魔晶石の魔力が尽きるのが先かの根気比べと言っているのだ。

両者一歩も譲らない一方的な破壊と、一方的な修復行為の繰り返しだ。

「あれじゃあ、不毛だ」

攻撃を緩めないコズバーンに呆れながら、アストールは細剣を抜いていた。

「……でも。助太刀したほうがいいかな」

メアリーも遂には弓を構える。

「いつ倒せるかもわかりませぬからな。拙僧もやるとしますかな」

ジュナルはその場で杖を構えていた。

「じゃあ、頼むぜ」

アストールの声に答えてジュナルは詠唱を始める。

「万物の現象を司る力の根源の象徴よ。我が力をこの杖を通じて発現させよ。我が主アストールに全てを削る水の力を、従者メアリーに全てを貫く水の力を！」

詠唱し終えるとジュナルの杖は光をはなっていた。放たれた光は、アストールの剣の白刃に宿り淡い水色の光を発する。同じようにメアリーの弓も水色の光に包まれていた。

ジュナルの魔法は二人の武器に、魔法の効果を付与するものだ。

ギガントスは地面の属性であるのは、その体を構成している物質から判断できる。

魔法にも相性があり、必ず弱点となる属性があるのだ。

地面を削ることができる水が、相性としては最高にいい。

「おし！　行くぞ！」

アストールは魔法を付与された細剣を片手に、コズバーンの元へとかけていた。

メアリーは矢を取り出して、弓を引き絞る。そして、コズバーンが襲うギガントスへと照準を合わせていた。

「ぬう！　手助けは無用と言ったはずだ！」

コズバーンは駆け寄ってきたアストールを怒鳴りつける。だが、アストールも負けじと大声で叫び返していた。

「こいつは、いつまで経っても倒せない！　どこかに組み込まれているはずの魔晶石を破壊しない限りな！」

そう言ってアストールはギガントスの足元で細剣を振るっていた。
水の魔法が付与された細剣の刃は、いとも簡単に足のど真ん中をすべるように切り裂いていく。
足を切断されたギガントスは、バランスを崩してそのまま後ろに倒れる。

「ほほう！　おもしろいではないか！」

コズバーンはエスティナのその腕前に、笑みを浮かべる。だが、攻撃していた手を緩めたわけではない。
倒れたギガントスに大斧を、何度も繰り返し、繰り返し叩き付け始めたのだ。

「ああ、おい！　ちょっと、待て」

「隙を見せたら負けということを、教えてやらねばなるまい！」

アストールの静止を無視して、斧を次々と繰り出していく。
再び繰り返される地鳴りと、えぐられて削られていくギガントス。
無暗に近寄ることができないアストールは、よこでその様子をみるしかない。
何度も繰り返し、執拗に破壊し、大斧はギガントスの胴体を削っていく。

「あ、あれは！」

そしてついには、その胴体の中心部まで削っていた。
ふと見れば、中心部で茶色に光り輝く宝石のようなものがみえた。
アストールはそれがすぐに魔晶石であることを確信する。

「あれか！　コズバーン！　あの茶色いの壊して！」

アストールが言うまでもなく、コズバーンは大斧を振り下ろす。
刃が茶色い魔晶石に迫った時だった。
とてつもない光が魔晶石から放たれ、二人を包み込んでいた。
目も眩むほどの怪光に対して、コズバーンもたまらず目をつぶる。
だが、振り下ろされた大斧は止まることなく、魔晶石を砕いた。はずだった。
耳鳴りのするような音が、辺りに響き渡る。ギガントスは片腕で大斧を受け止め、同時に体の修復にかかっていた。
深く傷ついた場所よりも、すぐに修復可能な部分を優先的に修復する。
最初にアストールが綺麗に切り落とした足を、修復して立ち上がる。
ようようと二人が目を開けた時、そこには胸の魔晶石が向きだしのギガントスが佇んでいた。

「メアリー！」

「わかってる！」

引き絞った矢に全神経を集中させ、メアリーは魔晶石に狙いを定める。
魔晶石の周囲はすぐに破片を吸い寄せて、修復にかかろうとする。
そして、彼女が矢を放つより前に、魔晶石をその体の破片の修復で覆い隠してしまった。
メアリーはそれでも、引き絞った矢を放っていた。
青白い光の尾を引いた矢は、まっすぐとギガントスの魔晶石のあった部分へと飛んでいく。

次の瞬間には矢が吸い込まれるように、ギガントスの胴体の中心部分に突き刺さる。
流石に魔法を付与していたとはいえ、貫通することはなかった。
だが、矢が突き刺さったギガントスは、瞬時に動きを止めていた。
そして、細かい傷の修復もその場で止まる。

「や、やったのか？」

ギガントスは暫く動きを止めていたが、その形を維持できなくなったらしく、ボロボロと崩れだしていた。矢じりが魔晶石に突き刺ささり、破壊したのだろう。

「そのようであるな」

コズバーンは警戒を解いて、崩れ落ちていく巨人を見据える。
存外にあっさりと決着がついたことに、アストールは大きく息を吐いていた。

「これは一度帰って、リアムとかいう持ち主に事情をきかねえとな」

腰に手を当てたアストールは、崩れ落ちた巨人を見てそう呟くのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8573z/

私の騎士（かれ）は女の子！？

2012年1月14日13時52分発行